



## 甲虫ニュース

No. 131  
October 2000

## COLEOPTERISTS' NEWS

日本産ハナノミ科ハナノミ族概説 6<sup>1)</sup>

高 桑 正 敏

Subgen. *Stenoglipa*FRANCISCOLO, 1952, *Annali Mus. civ. Stor. nat. Giacomo Doria*, 65: 331, 344 (type species: *Glipa malaccana* PIC).

本亜属は形態的によくまとまった群であり、尾節板がより長く発達して針状を呈する点で *Macroglipa* 亜属とはふつう容易に区別できる。さらに本属の解説中でも述べたことだが、生態的にも本亜属は特徴がある。すなわち、シダ類胞子を日常的に後食することが確実である点、生息環境的にはシダ類が繁茂するような、渓流沿いなど湿って多少とも暗い空間を好み、クワズイモのほかシダ類の葉上に姿を見ることが多い点、また行動的にも陽のよく当たる場所以外ではかなり不活発であり、曇天時でもしばしば葉上に見つかる点などで、*Macroglipa* 亜属とは明瞭に異なっている。TAKAKUWA (2000) は本亜属を再検討した中で、東洋熱帯とオーストラリア区周辺から 16 新種を含む 26 種 8 亜種を認め、それらの系統的なグルーピングを行った。日本産は 6 種が認められるが、斑紋をはじめとした外部形態の収斂が著しく、同定には注意を要する場合がある。これらは大きく次の 2 グループに分けられる。

ノムラオビハナノミグループ：より祖先的な群と考えられ、複眼には全体に細毛を密生；小顎肢の末端節は適度な二等辺三角形状；触角は太短く、5-10 節は鋸歯状；尾節板は長く、背面が緩やかな竜骨状、端は尖らない；

雄の前脛節は内へ湾曲する；雄第 8 腹板は小さく厚く、縦長の釣鐘状；雄交尾器の右側葉片の付属枝端は明瞭にえぐられる、などの特徴をもつ。日本には本グループの中でも最も祖先的な種と考えられるノムラオビハナノミ 1 種が分布する。海外では、中国南部からベトナム、スダラントにかけて異所的に 3 種が知られている。

ハリオオビハナノミグループ：より子孫的な群と考えられ、各形質は変化に富む。一般に、複眼は細毛をほとんど欠くか、部分的に疎生（一部の種は全体に密生）；小顎肢の末端節は非常に幅広い二等辺三角形状；触角はふつう細長く、かつ 5-10 節は弱く鋸歯状；尾節板は背面が急峻な竜骨状、端はふつう尖る；雄の前脛節はふつう内へ湾曲しない；雄第 8 腹板は薄くて大きく、ほとんどは横に広がる；雄交尾器の右側葉片の付属枝端はえぐられずに単純、などの特徴をもつ。日本には 5 種を産し、祖先的な順に次の 2 グループと構成種から成る。A: クロサワオビハナノミ、サタオビハナノミ、ワタナベオビハナノミ、B: ハリオオビハナノミ、イシガキオビハナノミ。海外においては、東南アジア一帯に別の 1 グループを含む 3 グループ 16 種（うち 4 種は日本と共通）が知られ、またウェーバー線より東の地域ではニューギニアを中心に色彩的に特

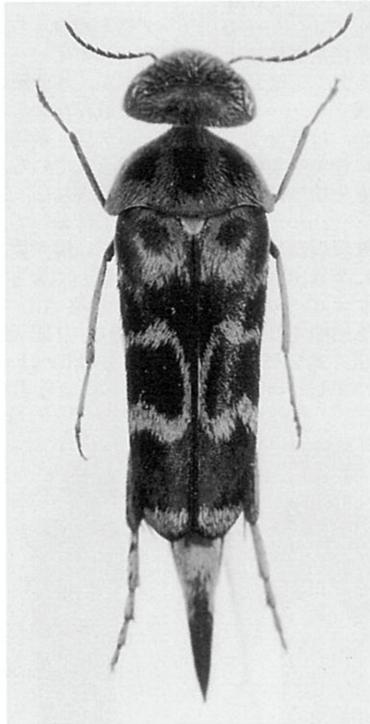


図 1. ワタナベオビハナノミ *Glipa* (*Stenoglipa*) *watanabei* TAKAKUWA, ♂, holotype.

殊化した別の 1 グループ 5 種（1 種は未命名種）が知られている。東南アジアの種は、ボルネオやスマトラ、マレー半島などに多く栄えており、B グループ

<sup>1)</sup> TAKAKUWA, M., Notes on the tribe Mordellini (Coleoptera, Mordellidae) of Japan, 6.

プ内の種はスダランド以外の島嶼においては異所的ないし側所的な分布傾向を示す。

種への検索表

1. 尾節板は非常に長く、鞘翅長の 0.6 倍程度、先端は背面からみて鈍い；雄前脛節は内方に明瞭に湾曲する；雄第 8 腹板は端中央が 2 葉状に突出した縦長の釣鐘型；複眼は非常に密に細毛で被われる……………ノムラオビハナノミ
- 尾節板はより短く、鞘翅長の 0.6 倍に達しないか、もし 0.6 倍程度の場合は先端が針状に鋭く尖る；雄前脛節は直線状か、まれに湾曲してもわずかに湾曲する；雄第 8 腹板は端へと大きく広がり、わずかに縦長または幅広い；複眼は細毛をほとんど欠くか、部分的に疎生、ときに全体に密生する……………2
2. 前胸背は無紋；雄触角は本亜属としては太短く、末端節の長さは幅の 2.4 倍；尾節板は先端が狭く切断状……………クロサワオビハナノミ
- 前胸背は有紋；雄触角は細長く、末端節の長さは幅の 3.2 倍以上；尾節板は背面から見て先端が針状に尖る……………3
3. 複眼はほぼ全面に毛を生やす；鞘翅基部紋には斜め後方へ会合部に達する条紋を欠く；尾節板は側面から見て先端が狭く切断状……………4
- 複眼は下部に疎らに毛を生やすか、ほぼ無毛；鞘翅基部紋は斜め後方へ会合部に達する条紋を備える；尾節板は側面から見ても先端は針状に尖る……………5
4. 鞘翅の環状紋はほぼ円形；雄第 8 腹板端は中央両側が広く湾入し、肩部は斜めに突き出す……………サタオビハナノミ
- 鞘翅の環状紋は前・後方部分とも屈曲する；雄第 8 腹板端は湾入せず、肩部は広く丸まる……………ワタナベオビハナノミ

5. 複眼は下部に疎らに毛を生やす；前胸背は金黄色微毛で被われ、黒色紋はより小さい；雄の第 8 腹板端の肩部は丸まる…ハリオオビハナノミ
- 複眼はほとんど無毛；前胸背は白～白黄色微毛で被われ、黒色紋はより大きく明瞭；雄の第 8 腹板端の肩部は角張る…イシガキオビハナノミ

ノムラオビハナノミ *Glipa (Stenoglipa) nipponica* NOMURA

*Glipa malaccana nipponica* NOMURA, 1957, Ent. Rev. Japan, 8: 40, fig. 1.

体長 10.3-13.4 mm. 斑紋と色彩は後述のハリオオビハナノミにきわめて類似し、同所的に分布することもあってそれとしばしば混同されてきたが、前述したように系統的には大きく異なる。単純には、体は細形、尾節板はより太く、端が針状に鋭く尖らないこと、鞘翅中央の環状紋が雌ではとくに縦長となって基部紋に連結するか、かなり近づくなどの点で区別がつく。NOMURA (1957) は本タクソンをハリオオビハナノミの亜種として記載した。そのタイプ標本列のうち、allotype (伊豆諸島御蔵島産, ♀) がハリオオビハナノミであることから推察すると、まさか、本亜属の中で斑紋が酷似している種が日本に複数存在するとは思ってもよらなかったのだろう。

屋久島、奄美大島、沖縄島では比較的多くの個体が得られているが、その他での採集例は各 1 例を知るにすぎない。奄美大島ではクマイチゴやタマシダの葉上において、小顎肢の末端節を用いて何かを口へ盛んに掃き集めるような行動が観察されたが、これは葉上に落ちているシダ類胞子を後食しているものと考察されている (学会発表: 高桑・永幡, 1999)。中国海南島からの記録 (FAN & YANG, 1993) は北ベトナムに分布する *G. (S.) rectefasciata* Pic のことと思われる。なお、長崎県平戸島産の標

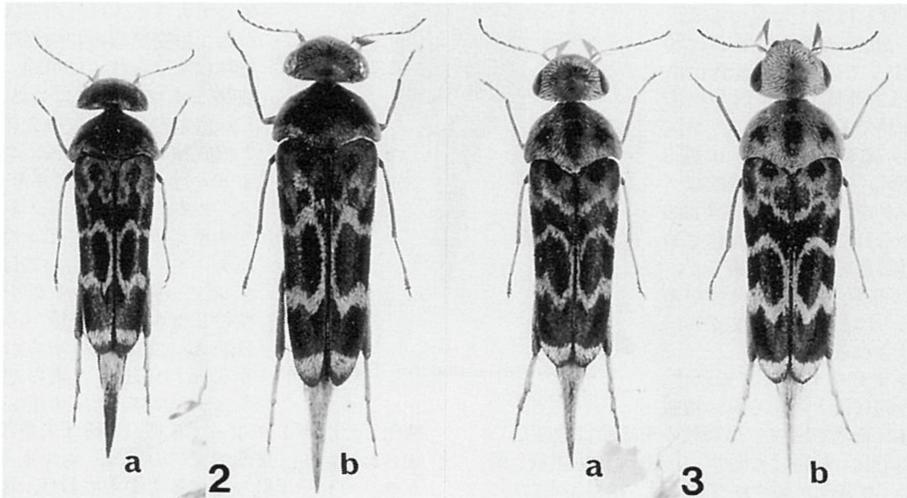


図 2-3. *Stenoglipa* 亜属 2 種。——2, ノムラオビハナノミ *Glipa (Stenoglipa) nipponica* NOMURA, 3, ハリオオビハナノミ *Glipa (Stenoglipa) hatayamai hatayamai* TAKAKUWA。——a, ♂; b, ♀.

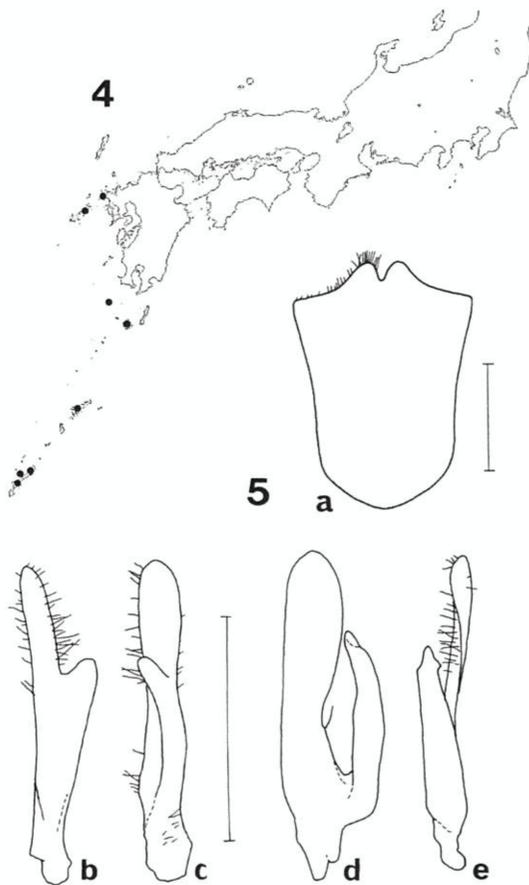


図4. ノムラオビハナノミ *Glipa (Stenoglipa) nipponica* NOMURA の分布。  
 図5. ノムラオビハナノミ *Glipa (Stenoglipa) nipponica* NOMURA, ♂. a: 第8腹板, b: 交尾器左側葉片(内面), c: ditto(右側面), d: 交尾器右側葉片(内面), e: ditto(右側面). Scales: 1 mm. (TAKAKUWA, 2000)

本も検している(未発表)。

分布: 五島列島中通島, 屋久島, 大隅諸島黒島, 奄美大島, 沖縄島 [基準産地]; 海南島?

クロサワオビハナノミ *Glipa (Stenoglipa) kurosawai* TAKAKUWA

*Glipa kurosawai* TAKAKUWA, 1985, Gekkan-Mushi, Tokyo, (176): 5, 9, pl. 2, fig. 4, text fig. 1.

体長 8.3-9.2 mm. 全体に非常に黒色味が強く, 前胸背は無紋(見た目に全体黒色), 尾節板端が背面・側面とも明瞭に切断される点で, 本亜属の他の種類とは容易に区別がつく。また, 触角が太短く, 5-10節はやや明らかな鋸歯状, 前脛節は内へやや湾曲し, 第8腹板は小さく, いくらか縦長, 交尾器の右側葉片は幅広い, などの祖先的な特徴をもつ。色彩や斑紋もかなり異なっているものの, 系統的に

は次種に近いと思われる。

筆者によって1976年に母島桑ノ木山付近で採集され, 原記載に用いられた4雄だけが知られる。

分布: 小笠原諸島母島 [基準産地]。

サタオビハナノミ *Glipa (Stenoglipa) azumai* NAKANE

*Glipa azumai* NAKANE, 1950, Trans. Kansai ent. Soc., 15: 21, fig.

体長 7.9-10.7 mm. 本亜属としては前種とともに小型, 体型は短くて丸みを帯びること, 鞘翅基部紋のうち後方会合部へと向かう斜帯を欠き, 環状紋はほとんど完全な円形となる点で, 他種とは容易に区別できる。

日本における既産地としては, 高知県中村市, 鹿児島県佐多岬, 屋久島, 大隅諸島黒島が知られているにすぎず, ほかに宮崎県産の標本も検している(未発表)が, 屋久島以外ではいずれも1例の記録があるだけのようである。北ベトナム産は1雄しか検していないが, 鞘翅の環状紋は前方紋側方で屈曲の程度が強いなどの差が認められる。

分布: 四国(西南部), 九州(南部) [基準産地], 屋久島, 大隅諸島黒島; 中国南部, 海南島, 北ベトナム。

ワタナベオビハナノミ *Glipa (Stenoglipa) watanabei* TAKAKUWA

TAKAKUWA, 2000, Bull. Kanagawa prefect. Mus. (Nat. Sci.), (29): 68, 71, figs. [18A, B], 17C-G.

体長 9.4-12.5 mm. 全体的な感じとしては前種によく似ており, 原色日本甲虫図鑑3巻(高桑, 1985)では前種に含められている。前種とは検索表に示した違いのほか, 体は概してより大きく細形, 触角はより細い点からも区別できるし, 雄交尾器の構造もよく似るものの右側葉片の付属枝は著しく頑強で長い。

日本では石垣島と西表島に分布し, やや湿った自然林中にイシガキオビハナノミと同時に見出されるケースが多い。ただし, 西表島では各地からイシガキオビハナノミに混じて多数が得られているものの, 石垣島からはオモト岳中腹で筆者が得た2雌しか検していない。台湾では中部の南投県でのみ採集されており, 八重山諸島産とは明瞭な差異を見出せないものの, 鞘翅の環状紋が上部で会合部から急に離れる傾向がある。なお, 原記載中, 本種として写真に示された個体は雌雄ともタイ北部の *G. (S.) ohmomoi* であり, 後種として示されている写真こそが本種である。

分布: 八重山諸島(石垣島, 西表島 [基準産地]); 台湾。

ハリオオビハナノミ *Glipa (Stenoglipa) hatayamai* TAKAKUWA

TAKAKUWA, 2000, Bull. Kanagawa prefect. Mus. (Nat. Sci.), (29): 78, 79, fig. 23A-G.

従来(原色日本甲虫図鑑3巻の高桑, 1985など)は *M. malaccana* PIC (= *M. annulata* (REDTENBA-

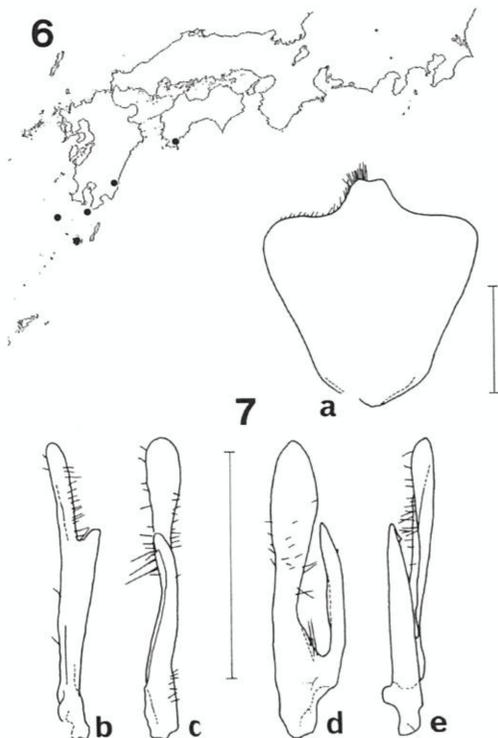


図6. サタオビハナノミ *Glipa (Stenoglipa) azumai* NAKANE の日本における分布。

図7. ハリオオビハナノミ *Glipa (Stenoglipa) nipponica* NOMURA, ♂。

a: 第8腹板, b: 交尾器左側葉片(内面), c: ditto (右側面), d: 交尾器右側葉片(内面), e: ditto (右側面)。Scales: 1 mm. (TAKAKUWA, 2000)

CHER); 基準産地は大ニコバル島)として扱われてきた種であり, また原色昆虫大図鑑2巻(野村, 1963)などではコウトウオビハナノミの和名が使用されている。一見しただけではノムラオビハナノミによく似ており, 同定にはいちおう注意を要する。ただ, それとは亜属内の系統に相当な隔たりがあり, 複眼はとくに下部にやや疎らな細毛を生やす程度, 鞘翅の環状紋は雌でより短く, 基部紋とは明らかに離れ, 尾節板は針状で先端が鋭く尖り, 見た目の第4腹板端の暗褐色毛はごく疎ら, 雄第8腹板は端両側が広く丸まるなど, 形態的な差も著しい。

分布: 伊豆諸島, 琉球列島(中・北部)[基準産地]; 台湾, 中国南部, インドシナ半島, インド北部。

鞘翅の斑紋と尾節板の微毛の違いなどから4亜種が認められ, 日本産は次の2亜種に分けられている。

Subsp. *hatayamai* s. str. (基準亜種)

体長 9.1-12.8 mm。触角長は雄で頭部幅の約1.23倍程度, 前胸幅よりも少し短く, 鞘翅の環状紋はより縦長, 尾節板の微毛はほとんど全体(雄は末

端を除き)が白色微毛で被われる。トカラ列島中之島産は体が細く, 尾節板端はいくらか黒色毛が増加する傾向があるなどの差が見出されるものの, ここでは本亜種に含めておく。

分布: 沖縄島 [基準産地], トカラ列島中之島。  
Subsp. *izuinsulana* TAKAKUWA

TAKAKUWA, 2000, Bull. Kanagawa prefect. Mus. (Nat. Sci.), (29): 80, fig. 24A-G.

体長 9.1-13.6 mm。触角長は雄で頭部幅の約1.45倍程度, 前胸幅よりも少し長く, 鞘翅の環状紋は基準亜種よりも多少とも短く, 尾節板は雄で側面の基部半分もしくは基部のみ, 雌で背面のせいぜい基半部分が白色微毛で被われる程度で, 見た目には雄雌とも背面は大部分が黒い。地域によって若干の差異が認められ, たとえば台湾産は鞘翅の環状紋がさらに短く, 基部紋のうち会合部へと向かう斜線は角度がより緩やか, 奄美大島産は鞘翅の環状紋が逆にやや長い傾向にあるものの, それぞれ本亜種に含めるのが妥当だと思われる。

分布: 伊豆諸島(三宅島 [基準産地], 御蔵島), 屋久島, 大隅諸島黒島, 奄美大島; 台湾, 中国南部, 海南島。

イシガキオビハナノミ *Glipa (Stenoglipa) ishigakiana* KONO

*Glipa ishigakiana* KONO, 1932, Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc., 12: 152, pl. 4, fig. 1.

前種によく似た色彩と斑紋をしており, 原色昆虫大図鑑2巻(野村, 1963)以降しばらくは *G. malaccana* の1亜種として取り扱われてきた。しかし, 種への検索表で示したように雄の第8腹板の形がまったく異なり, また雄交尾器の右側葉片の付属枝は著しく頑強であること, それぞれの系統はスングランドー帯で同所的に分布していることから, 両種を別種関係として扱うのが妥当である。

フィリピンのほぼ全域から紅頭嶼を経て琉球列島南部まで分布する一方で, 興味深いことに台湾には分布しない。記録した際に, 2亜種に分かれ, うち基準亜種が日本に分布する。紅頭嶼から記載された亜種 subsp. *kotoensis* NOMURA はより細く, 前胸背と鞘翅の淡色紋がほとんど純白色な点などで区別される。フィリン各島の個体群もこの亜種に含めるのが妥当だが, 鞘翅の斑紋などがいくらか異なっている。中国からも記録がある(FAN & YANG, 1993)が, 分布型からは他の種のことにはほとんど疑いが無い。

分布: 琉球列島(南部)[基準産地]; 紅頭嶼, フィリピン, 中国雲南省?

Subsp. *ishigakiana* s. str.

体長 8.81-13.3 mm。日本産本属中もっとも容易に得られるもので, 自然林ばかりでなく, しばしば二次林にも生息する。クワズイモの葉上に見ることが多く, 秋期にも出現する。大型の雌は体幅・体高とも増してすばらしく重量感がある。

分布: 八重山諸島(石垣島 [基準産地], 西表島, 与那国島)。

日本から初めて発見されたクロクシヒゲコメツキダマシ

鈴木 互<sup>1)</sup>

コメツキダマシ科は、甲虫の中では比較的小さなグループで、世界からこれまでに約 1,500 種が知られている。極地域を除く全世界に分布するが、熱帯地域にとりわけ多くの種が生息している。日本からは、FLEUTIAUX (1923) により 36 種が記録されて以降、久松定成博士や中根猛彦博士により多くの種が記載・記録され、現在では約 70 種の報告がなされている。この数は中央ヨーロッパに生息する種数の約 3 倍に相当するが、まだ十分に調査がなされているとはいえず、本土だけでなく、小笠原諸島や琉球列島といった亜熱帯地域を含めた調査がさらに進めば、かなり多くの新種や未記録種が追加されるだろうと推測されている。

筆者は、このコメツキダマシの仲間に興味を持ち各地の標本の収集をおこなっているが、最近、松本慶一氏が屋久島で採集されたコメツキ類の四角紙標本を拝見する機会に恵まれた。このコレクションにはヤクシマミヤマヒサゴコメツキといった採集例の少ない種も多く含まれ、とても充実したものであったが、その中からこれまでに見たことのない大型のコメツキダマシを発見することができた。体全体が黒く、一見メスグロミゾコメツキダマシ *Torigaia bicolor* HISAMATSU et M. SATO, 1959 を思わせる体型をしているが、より大型で 2 櫛歯状の触角をもつという特徴のあるものであった。さっそく標本を頂戴して持ち帰り、形態を詳しく調べたところ、南アジアに広く分布するクシヒゲコメツキダマシ属 *Procladidus* に所属するものであることが明らかになった。さらに既知種の原因記載や模式標本の写真と比較したところ、これまでベトナムからしか記録のなかった *Procladidus coomani* FLEUTIAUX, 1927 という種であることが確かめられた。今回の採集例は、日本における本種の最初の記録となる。ここに若干の形態記載をつけて、本種の紹介をしておきたい。

この小文を草するに当たり、興味ある標本をご恵与下さった、東京都高尾自然科学博物館の松本慶一氏に深く感謝する。

*Procladidus coomani* FLEUTIAUX, 1927

クロクシヒゲコメツキダマシ (新称)

*Procladidus Coomani* FLEUTIAUX, 1927, Bull. Soc. zool. Fr., 52: 134-135 (Tonkin: Lac-Tho, Hoa-Binh). (Syn-type in coll. Mueum National d'Histoire Naturelle, Paris). — FLEUTIAUX, 1947, Notes Ent. chin., Changhai, 11: 26 (Tonkin).

*Procladidus coomani*: LUCHT, 1984, Entomol. basil., 9: 177 [in key]. — MUONA, 1993, Ent. scad. Suppl., 44: 59, pl. 2, fig. 13 (Vietnam).

クロクシヒゲコメツキダマシ *Procladidus coomani* は、トンキン (現在のベトナム北部) で採集された個体数不明の標本に基づいて FLEUTIAUX (1927) によって命名記載された大型の種である。その後、本種は、FLEUTIAUX (1947) や LUCHT (1984) により

簡単な形態記載がなされ、さらに MUONA (1993) によりベトナム産 (詳細な地名の明記なし) の標本が原色で図示されたりしたが、ベトナム以外の地域からの記録は、これまでまったくなかった。今回の屋久島での発見により、本種はインドシナ半島北部だけでなく、遠く海を隔てた日本にも生息していることが明らかとなった。もちろん、本種はこれらの地域だけに生息する (隔離して分布する) とは考えにくく、これらの地域に挟まれた島々や大陸にも生息していることが推測される。将来、両地域をつなぐ多くの地域やその周辺地域で本種の生息が確認されることを期待したい。

形態

体長は 17 mm (ベトナム産は 13.5-17 mm)。体幅は 4.5 mm。体は細長い紡錘形。全体

は黒色であるが、口器 (大あごを除く)、付節第 4 節および爪は赤褐色となる。背面は強く膨隆し、鈍いオパール光沢を有する。背面は黒色の短毛で、腹面は褐色毛の短毛で覆われる。

頭部はわずかに膨隆し、中央に短い隆起線を備える (Fig. 2)。触角は第 3 節より 2 櫛歯状を呈し、先端節は前胸後角に達しない。前胸背板は強く膨隆し、点刻はややまばら、前方部には 1 対の不明瞭な凹陷を、基部には明瞭な中央縦溝を備える。前胸上

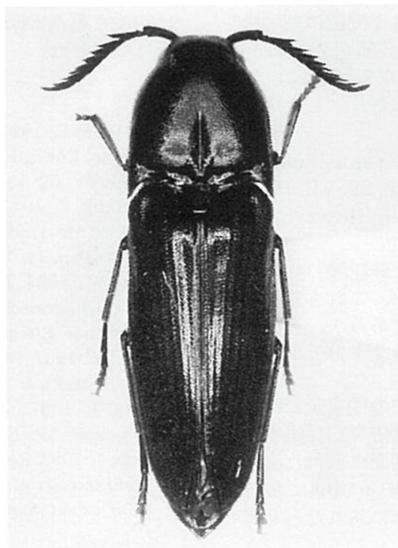
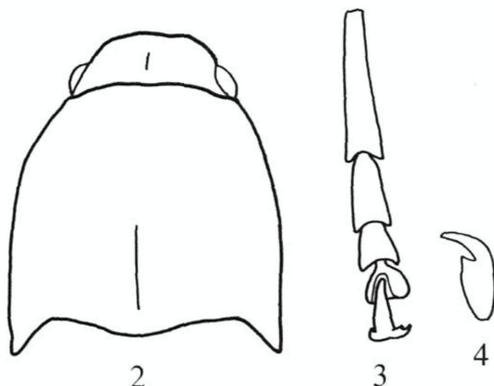


Fig. 1. *Procladidus coomani* FLEUTIAUX, from Yakushima Is.

<sup>1)</sup> Wataru SUZUKI: A new record of *Procladidus coomani* (Coleoptera, Eucnemidae) from the island of Yakushima, southwest Japan.



Figs. 2-4. *Procladidus coomani* FLEUTIAUX; 2, head and pronotum, dorsal view; 3, right hind tarsal segments, dorsal view; 4, tarsal claw, lateral view.

側板の外縁部には深い触角溝が存在する。小楯板は長四角形で、前縁ははっきりと縁取られる。上翅の条溝は不明瞭。中・後脛節外縁には赤褐色の刺毛横列を約20列備える。付節は第2・3節が先端に向かって若干拡張し、4節では顕著となる(Fig. 3)。爪は基半部が幅広くなり、内縁にははっきりとした切れ込みをもつ(Fig. 4)。

検視標本: 1♀, Mt. Moiyodake, Yakushima Is., Kagoshima Pref., Southwest Japan, 29. VII. 1998, Keiichi MATSUMOTO leg. (in coll. Hosei Univ. Daini High School, Kawasaki)。

分布: ベトナム, 日本(屋久島 [新記録])。

このような大型で特徴のある種が、これまで日本から発見されなかったのは不思議であるが、それだけ日本地域のコメツキダマシの調査が十分でないことを示しているのかもしれない。

本種の生態については、これまでの採集記録が少ないことから不明であるが、屋久島で今回採集された個体は、松本慶一氏によると、地面に倒れた直径30 cm程の広葉樹の朽ち木の上を不規則に歩き回っていたということである。産卵を訪れたとも考

えられるので、屋久島以南の島で調査される際は、横たわった朽ち木には留意願いたい。

#### 近似種との比較

本種は、ヒンドスタンに生息する *P. favrei* (FLEUTIAUX, 1912) にやや似るが、体がより大型で強壯であること、前胸背板には浅い凹陷が存在し、表面は滑らかであることなどの点で識別することができる。また、日本に生息する他のコメツキダマシとは、体が黒く大型で背面に鈍いオパール色の光沢を有すること、触角は第3節から2櫛歯状を呈すること、前胸背板には中央基部に明瞭な溝が存在すること、爪は2歯状あることなどの特徴によって、容易に識別することができる。

本種が含まれる *Procladidus* 属は、これまでに南アジア地域から3種が知られているにすぎない小さなグループである。以前はコメツキダマシ亜科 Eucneminae に納められていたが、最近、MUONA (1993) によってコメツキダマシ科の総括的な再検討がなされ、チャイロコメツキダマシ属 *Fornax* やヒメミゾコメツキダマシ属 *Dromaeolus* などとともに新設された Macraulacinae 亜科の Macraulacini 族に移された。

#### 参考文献

- FLEUTIAUX, E., 1927. Addition aux Melasidae de l'Indochine Française (Insectes Coléoptères). *Bull. Soc. zool. Fr.*, 52: 133-138.
- FLEUTIAUX, E., 1947. Révision des Eucnémides (Coléoptères) de l'Indochine Française. *Notes Ent. chin., Changhai*, 11: 1-68.
- LUCHT, W., 1984. Eine neue *Procladidus*-Art aus dem Naturhistorischen Museum Basel (Coleoptera, Eucneminae, Eucnemidae). *Entomol. basil.*, 9: 173-178.
- LUCHT, W., 1987. Die Käfer Mitteleuropas: Katalog. 342 pp. GOECKE & EVERS, Krefeld.
- MUONA, J., 1987. Generic names of the beetle family Eucnemidae. *Ent. scand.*, 18: 79-92.
- MUONA, J., 1993. Review of the phylogeny, classification and biology of the family Eucnemidae (Coleoptera). *Ent. scand. Suppl.*, 44: 1-133.

(東京都世田谷区)

#### ○ナルカワナガクシコメツキの記録

ナルカワナガクシコメツキ *Melanotus narukawai* KISHII, 1996 は、三重県大内山村南亦山で採集された1個体の雄標本に基づいて新種として記載された種であるが、その後の本種に関する記録はあまりないようである。筆者の手元には、本種と思われる次の標本があるのでここに記録しておく。

なお、鈴木・山崎(1999)は、岩手県産の♂の個体について触れているが、今回は調査することができなかったため、次の機会にあらためて報告したい。

1♂, 千葉県清澄山, 24. VI. 1990, 山崎秀雄採集; 1♂, 山梨県大月市大鹿峠付近(ライトトラップ), 5. VII. 1994, 中原・斉田採集。

ここに記録した千葉県産の標本は、鈴木・山崎(1999)において、ナガチャクシコメツキに似た新種 *Melanotus* sp. として記録したものである。また、この報文は、投稿してから印刷・発行が終了するまでに8年近くかかったため、すべての情報が投稿当時のままになっていることを明記しておく。

#### 参考文献

- 鈴木 互・山崎秀雄, 1999. 千葉県のコメツキムシ科甲虫. 千葉県生物学会編, 千葉県動物誌: 602-612. 文一総合出版。

(東京都世田谷区, 鈴木 互)

## 続日本産デオキノコムシ覚書\*

保科英人

著者は修士課程・博士課程の5年間を九州大学大学院に所属した。当時、「己むを得ない」理由により、ほとんど学会発表なるものを行わなかったが、それでもわずかばかりの回数ではあるが「日本産タマキノコムシについて」不特定多数の人を前に話す機会があった。そのつど「タマキノコムシは体色が地味で種間の変化に乏しく…分類は困難」とお約束の前ふりをしていたものである。ならば、体色が派手で種間の差が大きいグループであれば分類は簡単か、というつつこみが聞こえてきそうだが、これには否と答えざるを得ない。デオキノコムシ *Scaphidium* 属は、異論なく「体色が派手で種間の差が大きいグループ」であろうが、森本(1985)で見えるように種によっては雄のみで検索表を作製せねばならず、見た目ほど分類が簡単なグループではない。前作、森本・保科(1999)を発表してから(といっても著者は森本先生の原図を切り貼りし、封筒に住所を書いてポストに投函しただけにすぎぬ)、新たに知り得た日本産デオキノコムシに対する知見をここで発表したいと思う。

***Scaphidium amurense* SOLSKY, 1871**

(=*Scaphidium tsushimense* SHIRÔZU & MORIMOTO, 1963)

(和名: ツシマデオキノコムシ)

分布: 対馬, 朝鮮半島, 中国, 極東ロシア

*Scaphidium amurense* は、極東ロシアから SOLSKY (1871) によって記載された。また、ツシマデオキノコムシ *S. tsushimense* は、SHIRÔZU & MORIMOTO (1963) によって記載され、対馬固有種とされてきたが、LÖBL (1999) によりツシマデオキノコムシは、*S. amurense* SOLSKY のシノニムとされた。恩師の記載した種がシノニムとされ、著者は悲憤の涙をこぼさずにはおれなかったが、世界的権威の LÖBL 博士がなされた処置であるから、妥当であるとは思われた。しかし、以下の5つの理由によりもう一度著者自身で調べてみた。1) 名古屋女子大の佐藤正孝先生のコレクションの中に、*Scaphidium tsushimense* Det. LÖBL 1981 (1987?) という同定ラベルの付いた標本があるものの、これは雌個体であり、ツシマデオキノコムシの雄交尾器を LÖBL が実際に調べたかどうか解らないこと、2) LÖBL (1999) で本人がツシマデオキノコムシのタイプを見ていないと公言していること、3) LÖBL (1999) の *S. amurense* の分布地域に関する記述で、Japan: island Tsushima, pref. Gunma とあったこと。群馬県の対馬か、対馬と群馬県か(例えば *Elytra* でも分布の記述で Honshu, Shikoku という表記をしている論文がある) 両方に取りうる記述である。事実、

LÖBL が 1980 年に群馬県で採集したことは、ANGELINI & DE MARZO (1990) で明らかであり、LÖBL が実際に *S. amurense* を群馬で採集している可能性もあるし、もし「群馬県の対馬」と考えているのなら、日本の地理に暗い LÖBL が標本のデータを取り違えている可能性もありうる。またさすがに群馬には、ツシマデオキノコムシないし *S. amurense* は分布していないのではないかという著者の勝手な推測もある。ともあれ LÖBL の所持する標本データに一抹の不安が残ること、4) 一度シノニムとされた種をこの手で復活させて、森本先生に誉められたいという下心がないとは言えないこと、5) LÖBL (1968a) は朝鮮半島から *S. amurense* を記録しているが、幸い平成 12 年 6 月に著者は韓国産 *S. amurense* を 4 頭採集しており、また対馬産ツシマデオキノコムシも佐藤先生のコレクションのほか、生川展行氏採集の標本等が多数手元にあり、比較材料を有していたこと、この5つの理由である。

まず *S. amurense* の原記載 SOLSKY (1871) から当たってみた。当時としては相当詳しく丁寧に記載している方であると思うが、なにせ明治 4 年、明治建国の端を発したばかりの時代の記載だ。全形図があるわけではなく、雄交尾器の図示も望むべくもない。しかし、LÖBL (1968a) による朝鮮半島からの *S. amurense* の初記録とほぼ同時期に、TAMANINI (1969) が、露国ウラジオストック産の標本を基に、本種の雄交尾器の詳細な図を表した。これらの文献と、対馬と韓国産の標本としばらくにらめっこしたが、残念ながらやはり LÖBL (1999) の *S. tsushimense* が *S. amurense* のシノニムであるという処置が正しいことを再確認した。LÖBL (1968b) は *S. amurense* の種内変異が著しいことを述べているが、これは地域差ということより、同地域内での変異ということだろう。例えば著者は、斑紋以外の種内変異として、雄前脛節が幅広いもの、細長いもの2つのタイプを見いだしたが、これは同地域内で両タイプ出現するので、この形質をもって対馬産と韓国産デオキノコムシを分けることはできなかった。ようするにツシマデオキノコムシに対応する学名は *S. amurense* ということである。

さて、対応する学名が変わったので、本種の和名はどうすべきであろうか。*S. amurense* という学名からアムールデオキノコムシという和名がまず思いつくし、トンボの和名を参考にすれば、タイリクデオキノコムシ、マンシュウデオキノコムシといった名前が頭に浮かぶ。個人的にはこの3つの中に気に入りの名称があるが、学名が変わっても本質が変わったわけではないので、無用の混乱を避けるため

\* Hideto HOSHINA: Further note on the genus *Scaphidium* (Coleoptera: Staphylinidae: Scaphidiinae) in Japan.

従来の「ツシマデオキノコムシ」を踏襲したい(むしろ, 保科(1999)のように, 学名は変わらないが, その学名と対応する実際の虫に変更があった場合は, 和名を変更した方が混乱が少ないと愚考する).

*Scaphidium optabile* (LEWIS, 1893)

(和名: コクロデオキノコムシ)

分布: 九州, 四国, 対馬

コクロデオキノコムシは斑紋を欠く真っ黒なデオキノコムシで, かの LEWIS (1893) によって, *Scaphidium optabile* として熊本から記載され, その後 ACHARD (1923) によって設立された *Parascaphidium* 属の模式種とされた。しかし, LÖBL (1968b) によって, *Scaphidium* 属に移され現在に至っている。

さて, この LÖBL (1968b) では, コクロデオキノコムシ (以後コクロと略す) と近縁と思われる *Scaphidium comes* (和名新称: チョウセンコクロデオキノコムシ, 以後チョウセンコクロと略す) という種が朝鮮半島より記載されている。コクロの方は, 今まで九州固有種とされてきた。しかし最近, 生川氏より, 対馬産コクロの標本をお預かりすることができた。対馬は大陸との関係上, 多くの甲虫屋が訪問し, 各地の同好会誌に成果を発表されるので, 今回の拙文が本当にコクロの対馬新記録であるかどうか自信がないが, 一応採集データを公表し, 正式に

記録しておくことにしたい。

コクロデオキノコムシ 2♂♂1♀, 対馬竜良山, 10. vii. 1988, 生川展行採集。

さて, 対馬という「微妙な」地理的条件から, 「黒いからコクロデオキノコムシだろ」という同定はもちろん許されず, チョウセンコクロとの比較が必要となった。これも幸い佐藤先生のコレクションと, 九州大学のコレクションの中に1メスずつのチョウセンコクロの標本があり, これまた佐藤先生のコレクションの中の *Scaphidium optabile* という LÖBL 博士の同定ラベル付き対馬産コクロの標本を調べることができた。また LÖBL (1968b) の中にコクロとチョウセンコクロの2種を含んだ検索表があり, この検索表を参考にすることができた。これだけ参考材料があるのであるから, 「対馬の黒いデオキノコムシ」に関してはすんなりいくと思われた。しかし, 残念ながらこの検索表なるものが鬼門であった。よそ様の検索表にケチを付けると「お前のはどうなのか」という集中砲火を浴びること必然であるのでなるべくはきけたいのが本音ではある(実際, 著者の作成した検索表で落ちないという意見を寄せられたことあり)。しかし, この検索表の詳細な紹介は省くが, 検索表にある触角第1~3節間での長さの比がどうだこうだというのははっきりいって使えない形質である(図1-2)。また検索表にある前胸背板の点刻の状態もまた, 個体差が大きく, この2種の区別には使えない形質である。これ以外の検索表に示されている形質は, オスのみで使われるものなので(後胸腹板の点刻・毛), 単刀直入に言えばメスでは, コクロとチョウセンコクロの区別は難しい。著者はチョウセンコクロのオスを検する術を今の所持たず, この2種のオス同士を比較することができなかったが, この2種のオス標本を同時に調べた LÖBL 博士の同定標本の存在と, 対馬産のオス標本が明らかに九州産のコクロと同形質を持つので, 対馬産の「黒いデオキノコムシ」は, コクロデオキノコムシと同定した。

コクロの分布に関しては, もう一つ新知見がある。前述のように, コクロは今まで九州固有種とされてきたが, LÖBL (1968b) の中で調べられたコクロの標本のうちのの一つに, 1♀, Tokushima, coll. Slovak National Museum, Bratislava というものがある。この Tokushima 産と称する標本に関して, 採集者・年月日等の情報は一切記述されていない。他の標本に関しては, きちんとこれらのデータを記述してあるのだから, LÖBL 博士の怠慢ではなく, この標本そのものにきちんとしたラベルがっていないのであろう。現在まで, この Tokushima 産のコクロの記録は, 今まで単に忘れられてきたのか, 何かの間違いでであるとして一笑に付されてきたのか, どちらかはわからないが, コクロが四国に分布するとはされてこなかった。著者は別に探偵ごっこが好きなのではないが, 取りあえず3つの仮説を立ててみた。1) Tokushima は例えば対馬か何か

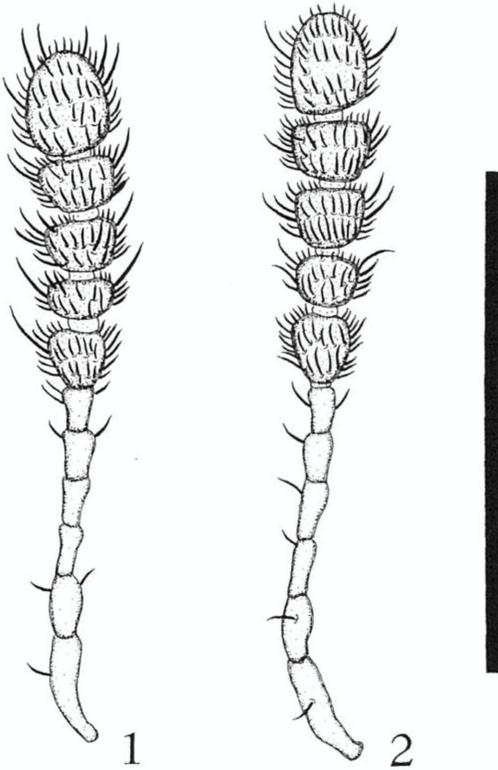


図1-2. 触角. 1, コクロデオキノコムシ; 2, チョウセンコクロデオキノコムシ. Scale: 1 mm.

の間違い。外国人が採集したのであれば、このような事は日常茶飯事だろう。2) 九州内のマイナー地名の Tokushima ではないか、3) コクロは九州固有種ではなく四国にもいる、という3つである。まず、仮説1は肯定も否定もできない。可能性として永遠に残るだろう。仮説2であるが、まず熊本県との県境に近い福岡県高田町に徳島という地名がある。また、肥前国に著名な戦国大名の龍造寺氏と血縁関係があった徳島氏という豪族があり、この徳島氏の屋敷跡付近にやはり徳島と冠する地名が今も残っている。この他にも Tokushima という地名が九州内にあるやもしれぬ。仮説3であるが、著者は愛媛の石鎚山と徳島の剣山ではさざん草採集しているが、コクロを採ったことはない。そこで、仮説1か2が妥当なところだろうと考えていたところ、徳島県在住の吉田正隆氏のデオキノコムシのコレクションをお預かりする機会があり、その中になんと4頭の徳島産コクロがあったのである。念のためオス交尾器を九州産のもの比べ、やはりコクロと断定した。平成12年度札幌の鞘翅学会大会では、カミキリムシの採集地データの間違いの可能性を取り沙汰されていたが、徳島の甲虫を多く採集され同県の甲虫相の解明に力を注がれておられる吉田氏の標本である。採集地データを疑う方はおられまい。スロバキアの博物館所蔵のコクロはおそらく九州ではなく、蜂須賀家のお膝下でかつ阿波踊りの徳島で採集され、また吉田氏の標本をもってして本種が四国に分布することは絶対確実である。本種はいずれ本州でも見つかるかもしれない。それとも著者の知らぬ雑誌で既に発表されているのであろうか？どちらにせよ拙文はコクロが四国に分布することの再発見ということになろう。なお、肝心の LÖBL 博士は徳島が四国か九州にあるか、特に興味を持たれなかったようで、LÖBL (1997) でもコクロの分布域は、Kyushu とのみ記されている。

末筆ながら、日頃よりご指導を頂いている九州大学名誉教授の森本 桂先生に厚く御礼申し上げるとともに、貴重な標本を調べる機会を与えてくださ

た名古屋女子大学の佐藤正孝先生、三重県在住の生川展行氏、徳島県在住の吉田正隆氏(五十音順)に心より御礼申しあげる。

#### 参考文献

- ACHARD, J., 1923. Révision des Scaphidiidae de la faune japonaise. *Fragm. ent.*: 94-120.
- ANGELINI, F. & L. DE MARZO, 1990. Anisotomini del Giappone (Coleoptera, Leiodidae). *Ent. Bari*, 23: 47-122.
- 保科英人, 1999. 日本産タマキノコムシ科 *Anisotoma* 属メモリアル。ねじればね, (85): 6-9.
- LEWIS, G., 1893. XLIX. -On some Japanese Scaphidiidae. *Ann. Mag. nat. Hist.*, 11: 288-294.
- LÖBL, I., 1968a. Beitrag zur Kenntnis der Scaphidiidae und Pselaphidae von Korea (Coleoptera). *Annal. Zool.*, 25: 419-423.
- LÖBL, I., 1968b. Description of *Scaphidium comes* sp. n. and notes on some other Palaearctic species of the genus *Scaphidium* (Coleoptera, Scaphidiidae). *Acta. ent. bohém.*, 65: 386-390.
- LÖBL, I., 1997. Instrumenta biodiversitatis. I. Catalogue of the Scaphidiinae (Coleoptera: Staphylinidae). 190 pp. Muséum d'histoire naturelle, Genève.
- LÖBL, I., 1999. A review of the Scaphidiinae (Coleoptera: Staphylinidae) of the People's Republic of China. I. *Rev. suisse Zool.*, 106: 691-744.
- 森本 桂, 1985. デオキノコムシ科。上野俊一ほか編, 原色日本甲虫図鑑, 2: 252-258. pl. 45. figs. 10-35. 保育社。
- 森本 桂・保科英人, 1999. 日本産デオキノコムシ科3種についての覚書。甲虫ニュース, (125): 7-8.
- SHIRÔZU, T. & K. MORIMOTO, 1963. A contribution towards the knowledge of the genus *Scaphidium* OLIVIER of Japan. *Sieboldia*, 3: 55-90.
- SOLSKY, S., 1871. Coléoptères de la Sibérie orientale. *Horae soc. ent. ros.*, 7: 334-406.
- TAMANINI, L., 1969. Gli Scaphidiidae del Museo Civico di Storia Naturale di Milano, con appunti sui caratteri specifici e descrizione di una nuova specie (Coleoptera). *Atti. soc. ital. sci. nat. Mus. Civ. St. Nat. Milano*, 109: 351-379.

(横浜国立大学環境科学研究センター)

#### ○フサヒゲルリカミキリの古い記録

非常に旧聞で恐縮だが、筆者の所持するフサヒゲルリカミキリ (*Agapanthia japonica* KANO) のデータを記録しておきたい。

3♂♂, 長野県蓼科温泉, 24. VII, 1946, 木村欣二採集。

採集場所は、蓼科温泉の滝の湯という旅館の下手であった。おそらくその所有地だったかと思う。旅館からの排水が小流となって、周辺がスキ、ノハナショウブ、ワレモコウなどの混じる草地をなしていた。カンゾウの類もあったがユウスゲの知識はなかった。当時、筆者は10才であった。この草むらわけて歩くと、フサヒゲルリが飛び立って2~3m先の葉先にとまる。これで次々に採れたので飛び前

に探す事をしなかったのが悔やまれる。さらに悔やまれる事は、この時、幼虫採集管しか携行しておらず、それに詰め込んだために、互いに噛み合せて数頭がすべて駄目になってしまった。翌日、再び同じ場所を訪れ、採集したのが前記の標本である。この地をその後訪れていないが、おそらく現在は、市街地となっているだろう。

大野正男博士が、Field Biologist 5 巻 2 号 (1995) に発表された本種に関する知見総覧を拝見したところ、蓼科の記録はない様なので、旧聞を顧みず、記録しておくこととした。大野博士及び上記の文献を筆者に恵与され、発表を薦められた高桑正敏博士に、感謝の意を表す。

(東京都大田区, 木村欣二)

## ○キイロアラゲカミキリほか数種カミキリの採集例

榛原郡本川根町において、カラスザンショウをスーピングしてキイロアラゲカミキリを採集することができたので報告する。日本産カミキリ大図鑑によると、本種は愛知県の都市部での記録が東限で、東日本では得られていなかったようである。

本川根町では、過去にスネケブカヒロコバネカミキリが得られており、ミツギリゾウムシやクロフアシナガカッコウも得られるなどかなり南方系の昆虫が進出している地域である。また、静岡県では記録の少ない次のようなカミキリも得ているので併せて報告しておく。

## 1. ケプトハナカミキリ

*Caraphia lepturoides* (MATSUSHITA)

1♂1♀, 本川根町長島, 24. VI. 1999; 1♂, 本川根町平田, 2. VII. 1999.

夕方6~7時ごろ土場脇に山積された伐採枝の葉がなくなったものに静止中の個体を得た。

## 2. スネケブカヒロコバネカミキリ

*Merionoeda hirsuta* (MITONO et NISHIMURA)

1♂, 本川根町梅地, 7. IIX. 1999.

カラスザンショウの花をすくって得た。同地域には、ネムノキがかなり多く見られる。

## 3. トラフソバネカミキリ

*Thranus variegatus* BATES

46♂♂46♀♀, 本川根町長島, 16. VI.-5. VIII. 1999.

ほとんどの個体は、土場脇にあった1本のサクラの枝先に飛来したもの。日中12時頃より1時頃が多く、夕刻や朝早くでは見られなかった。材にはほとんど集まらなかったが、午後2時~3時頃に雌が産卵行動をしているのを数回見かけた。また、同じく土場脇にあったアカメガシワ生木の折れた部分に、産卵行動を取っている個体も観察している。

## 4. ムネマダラトラカミキリ

*Xylotrechus grayii* (WHITE)

1頭, 本川根町長島, 23. VI. 1999; 1♂, 同上, 24. VII. 1999.

6月23日の個体は、頭胸部のない死骸を土場の材上で見つけたもの。他の1個体は、土場周りの下草葉上で得た。

## 5. マダラゴマフカミキリ

*Mesosa poecila* (BATES)

1♀, 本川根町長島, 23. V. 2000.

二次の雑木林の中で、巻き枯らしされた樹種不明の樹皮が黒い立ち枯れ木より得られた。静岡県で標本の確認できる記録としては、1982年の1雄に継ぐ2頭目の記録と思われる。

## 6. キイロアラゲカミキリ

*Pentides rufoflavus* (HAYASHI)

1♂2♀♀, 本川根町梅地, 2. VIII. 1999; 1♂, 同上, 5. VIII. 1999; 1♂, 同上, 7. VIII. 1999.

スネケブカヒロコバネカミキリを採集するつもりで、カラスザンショウの花をすくったところ得られた。同地では、谷浴いにカラスザンショウがかなり

見られる。今のところ分布の東限と思われる。

## 7. カスガキモンカミキリ

*Paramenesia kasugensis* (SEKI et KOBAYASHI)

1♀, 本川根町長島, 23. VI. 1999.

夕刻5時頃、伐採枝を山積みにした周囲を飛翔中の個体を得た。

## 8. ヒゲナガヒメリカミキリ

*Praolia citrinipes* BATES

1♀, 本川根町梅地, 29. VII. 1999.

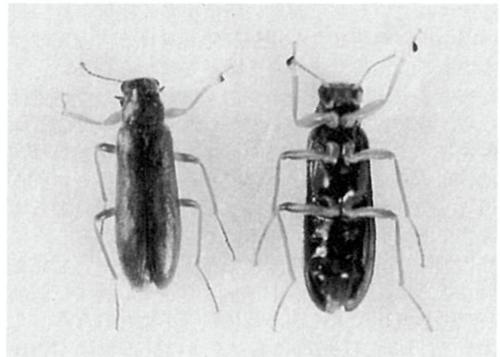
飛翔中の個体を偶然見つけ、ダンコウバイの葉に静止したところを採集した。

(静岡県焼津市, 杉本可能)

## ○山梨県におけるヒラテナガクチキの採集例

ヒラテナガクチキ *Stolius diversipes* (PIC) は少ない種で、これまでに山梨県大菩薩嶺、長野県扉峠、三重県大台ヶ原、大分県黒岳から記録されている。筆者は、山梨県須玉町本谷川金山沢で本種を採集したので報告する。

1♀, 3. X. 1998; 2♂♂, 19. IX. 1999. (いずれも筆者採集)



いずれも林内でシオジの枝を叩いて採集した。採集したのは、青い葉が付いた折れてあまり時間が経過していない枝と生木に残った半枯れの枝で、古い枯れ枝では採集できなかった。本種の発生時期が、生木の枝を多数折る台風の通過時期と一致しており興味深い。

なお、近似種ヨツボシキバネナガクチキ *Stolius vagepictus* LEWIS は、一般に本種より低標高地に生息するとされているが、1998年10月3日、金山沢(標高約1,400 m)より標高の高い瑞牆山荘付近(標高約1,600 m)にて、サルナシの枯れヅルを叩いて採集した。

## 参考文献

- 城戸克弥, 1996. ヒラテナガクチキ・ヨツボシキバネナガクチキを九州から発見。甲虫ニュース, (114): 6.  
水野弘造, 1994. ナガクチキムシ漫談(10). 北九州の昆虫, 41 (2): 98.

(東京都足立区, 木元達之助)

ムネモンヒメハナカミキリの分類と分布について

窪木幹夫・栗原明雄

ムネモンヒメハナカミキリ *Pidonia (Pidonia) misenina* S. et A. SAITO, 1992 は、紀伊半島の弥山産の標本を用いて記載された。これ以前、本種には *P. (P.) maculithorax* という学名が使用されてきた。齊藤らは、*P. maculithorax* の基準標本を調べ、ムネモンヒメハナと *P. maculithorax* は、異なる種であると指摘した。そして、学名がなくなってしまったムネモンヒメハナに *misenina* という種小名を与えた。

従来、ムネモンヒメハナは、中部山岳地域の西部、中国山地の東部そして紀伊半島に分布するとされてきた。しかし、*P. misenina* の記載では、弥山以外の標本が使用されていないし、他地域の標本とも比較されていない。早川・降旗(1993)は、本種の木曾御岳山の採集記録の報告に、紀伊半島特産とされてしまったムネモンヒメハナ *P. misenina* の種名を当てるわけにもいかないので、ムネモンヒメハナの近縁種 *P. sp.* として報告し、紀伊半島以外の標本と比較をしていない記載の不備を指摘した。

筆者らは、東海地方から関東地方南部の *Pidonia* 調査の過程で、紀伊半島の個体とは異なるムネモンヒメハナを採集した。そこで、はじめにムネモンヒメハナから外されてしまった近畿地方西部から中部山岳地域の西部の標本と紀伊半島のムネモンヒメハナを比較した。次に、これらと東海地方から関東地方南部の標本を比較検討した。これらの結果について報告する。

本文に先立ち、貴重な標本を提供して下さった加藤昭児、中林博之、佐々治寛之博士の各氏に厚くお礼申し上げます。

1) 近畿地方西部から中部山岳地域の西部

検視標本: 1♂, 1♀, 兵庫県大屋町水ノ山 (標高 1,100 m), 3. VII. 1993, 窪木採集; 1♀, 福井県池田町冠山, 12. VI. 1982, 佐々治採集; 4♂♂, 1♀, 富山

県大山町有峰湖 (1,190 m), 15. VI. 1997, 窪木採集; 1♂, 3♀♀, 長野県戸隠村戸隠高原 (1,190 m), 29. VI. 1996, 窪木採集; 1♀, 新潟県妙高高原町富士見平, 16. VII. 1984, 中林採集; 3♂♂, 1♀, 岐阜県高根村千間樽 (1,500 m), 13. VII. 1999, 加藤採集。

近畿地方西部から中部山岳地域の西部の標本と紀伊半島の稲村ヶ岳、弥山や大台ヶ原山の標本を比較すると体形、色彩、特に前胸側部の黒紋、さらに♂交尾器 (図2と5) や末端節腹板 (図3と6) などの形態がほぼ一致した。

2) 東海地方~関東地方南部

検視標本: 1♂, 山梨県塩山市笠取山, 9. VII. 1995, 栗原採集; 1♀, 同市斎木林道, 27. VI. 1998, 栗原採集; 1♂, 同市大菩薩, 27. VI. 1998, 栗原採集; 1♂, 1♀, 静岡県中伊豆町天城山 (1,050 m), 12. VI. 1999, 窪木採集; 1♂, 1♀, 同, 栗原採集; 3♂♂, 3♀♀, 同地, 10. VI. 2000, 窪木採集; 3♂♂, 3♀♀, 静岡県富士宮市高鉢山 (1,700 m), 10. VII. 1999, 窪木採集; 2♂♂, 2♀♀, 同, 栗原採集; 1♂, 長野県上村しらびそ峠 21. VI. 1998, 栗原採集。

紀伊半島から中部山岳地域の西部の個体と比較して、東海地方から関東地方南部のそれは、♂の末端節腹板の中央が丸く、浅く切れ込む (図9)。♂交尾器の中葉片の先端が突出する。また、盲管 diverticulum が長い (図8) など、形態が異なっている。体の黒色部の退色が著しく、鞘翅斑紋の縮小が顕著である。図7に示した高鉢山産♂個体は比較的黒紋の発達した個体である。退色の著しい個体は、鞘翅端の黒紋を欠く。

稲村ヶ岳 (奈良県) の♂と高鉢山 (静岡県) の♀の交尾実験で、♂が♀にマウントし、交尾器中葉片内の内包 endophallus の挿入を試みた例を観察している。

以上の結果から、*misenina* として弥山から記載

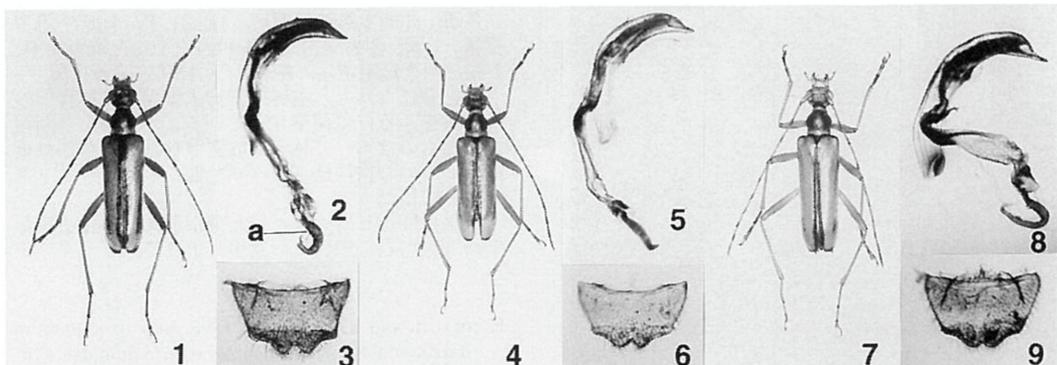


図1-9. ムネモンヒメハナカミキリ *Pidonia (Pidonia) misenina* S. et A. SAITO. ♂, 1-3, 奈良県大台ヶ原産; 4-6, 長野県戸隠産; 7-9, 静岡県高鉢山産. 2, 5, 8, 交尾器中葉片; 3, 6, 9, 末端節腹板; a, 盲管。

されたムネモンヒメハナは、紀伊半島特産種ではなく、従来考えられてきたとおり、氷ノ山、中部山岳地域の西部にも分布すると考えられる。しかし、東海地方から関東地方南部に分布する個体群は、これらの地域とは形態的に違いが認められた。両者の分類学的な関係は、中部山岳地域の東部や関東地方北部の調査を行ったうえで結論を出したい。

#### ○シララカハナカミキリを日高山脈芽室岳で採集

シララカハナカミキリ *Judolia sexmaculata* LINNÉ は、北海道においては渡島半島を除く地域の概ね標高 1,000 m 以上の高地に局地的に分布する。本種の幼虫は極東大陸では針葉樹を寄主とすることが知られ、北海道でも既知産地の大部分は自然度の高い針葉樹林または針広混交林に位置している。このような生態を反映してか、針葉樹林の発達が悪い日高山脈における本種の記録は非常に少なく、わずかに藤村 (1957) が具体的なデータを示さずに「新冠」において「得られている」と述べているにすぎない。筆者は本種を日高山脈の芽室岳で採集したので記録しておきたい。

1♀, 北海道清水町芽室岳北尾根 1,300 m 付近 (環境庁メッシュ番号 6442-26-52), 19. VII. 1999, 芳賀 馨採集・保管。

採集地点は樹高 4~5 m のやや矮小化したダケカンパの疎林で、林床はササ類を主体としハイマツが散在していた (写真)。当日は霧雨を突いての登頂であったが、午前 10 時ころから晴間が見えたため頂



芽室岳北尾根のシララカハナカミキリ採集地点。

#### 引用文献

- 早川広文・降旗進一郎, 1993. 長野県のカミキリムシその後。まつむし, 83: 27-34.  
SAITO, S. et al., 1992. A new *Pidonia* from Mt. Misen and its cohabitants. *Acta Coleopterol. Japon.*, (2): 18-25.  
(窪木: 東京都世田谷区)  
(栗原: 東京都武蔵村山市)

上部の雪渓を撮影しようとして荷を下ろしたところ、上記の個体が叩き網 (白) にむかって飛来したものである。

採集した尾根の植生は、環境庁の植生図によれば、標高 700~1,050 m がエゾマツ・ダケカンパ群落、1,050~1,500 m がササ・ダケカンパ群落とされている。しかし実際には、標高 1,050~1,200 m のわずかの幅であるが、アカエゾマツが目立つエゾマツ・トドマツ群落が存在している。芽室岳の南東斜面 (芽室町美生川源流部) では伊藤 (1991) によりカタキカタビロハナカミキリが記録されているが、本種も日高山脈では非常に記録が少ない針葉樹食性の種である。これらの種は、上記のように局所的に存在する針葉樹林に依存してかろうじて生存しているのかもしれない。

#### 参考文献

- 藤村俊彦, 1957. カミキリムシ雑記。あきつ, 6: 41-44.  
伊藤勝彦, 1991. 芽室町美生川流域における甲虫相 (I). *Sylvicola*, 9: 23-30.  
伊藤浩司・春木雅寛, 1979. 現存植生図・御影。環境庁。  
大林延夫・佐藤正孝・小島圭三編, 1992. 日本産カミキリムシ検索図説。450 pp. 東海大学出版会。  
佐々木恵一・長尾 康・鈴木敏春, 1993. 北海道のカミキリ科の分布について。 *jezoensis*, (20): 49-162.  
(埼玉県浦和市, 芳賀 馨)

#### ○*Imathia ryukyuensis* (ゾウムシ科) の追加記録

*Imathia ryukyuensis* は KOJIMA & MORIMOTO (1998) によって記載された種で、沖縄・石垣・西表・与那国の 4 島からの分布が知られている。新産地はないが、本種の標本を若干所持しているので報告する。

2 頭, 沖縄本島与那覇岳, 16-21. IV. 1997, 筆者採集; 1 頭, 西表島古見, 8-11. IV. 1997, 筆者採集; 1 頭, 西表島祖納岳, 8-11. IV. 1997, 筆者採集。

原記載によると、本種は常緑広葉樹林の林縁部の落ち葉をふるって採集されているようだが、今回報告したものはすべて林床に放置された、まだ枯れ葉のついている伐採枝 (スダジイ他) のピーティングによって得た。

採集に同行していただいた東京農業大学昆虫資源学研究室の石川忠氏にお礼申し上げる。

#### 参考文献

- KOJIMA, H. and K. MORIMOTO, 1998. New *Imathia* from Japan and Taiwan (Coleoptera: Curculionidae, Curculioninae, Storeini). *Entom. Sci.*, 1(2): 249-255.

(東京農大, 吉武 啓)

## ミトコンドリア DNA によるクロオサムシ (*Ohomopterus albrechti*) とその関連種の分子系統

Ken OYAMA・蘇 智慧・富永 修・斎藤秀生・柏井伸夫・大澤省三

蘇ら(1996)は、ミトコンドリア(mt)ND5 遺伝子を用いて、日本の *Ohomopterus* (オオオサムシ亜属) の分子系統を調べ 8 系統の存在を推定した。その中の JSE (日本海島・東日本) と名付けた系統は他の 7 系統と異なり、本州を横断した分布域をもつ点で特徴的である。対馬のツシマオサムシ、隠岐のオキオサムシ、本州の紀伊半島以北に分布するヤマトオサムシ、スルガオサムシ、ルイスオサムシとその亜種とされるアワカズサオサムシ、およびクロオサムシがこの系統に含まれる。クロオサムシは多くの亜種に分けられ、キタクロオサムシ、トウホククロオサムシ、エサキオサムシ、サドクロオサムシ、マルバネオサムシなどがその代表としてあげられる。当時は資料不足でわずか 11 サンプルを分析したにすぎなかったが、その後、各地から多数のサンプルを集め、これまでに 77 個体を分析、系統関係をかなり詳しく推定することができた。その結果の

大要を予報としてここに紹介するが、形態からの種、亜種の区分や系統関係とは、多くの点で一致せず、形態変化と系統分化は必ずしも同調していないように思われる。

MtND5 と COI の 2 種類の遺伝子を用いたが、細かな点を除き両者の系統樹はよく一致しているのので、ここでは簡略化した COI の系統樹をあげておく(図 1)。系統樹の外群には、日本南西部のいわゆるヒメオサムシを用いたが、すでに蘇ら(1996)が報告したように、今回取り扱ったグループとは遠縁である。

図 2 に示したようにここで取り上げるグループは mtDNA では明確に 7 亜系統に分けられる(図 1 の I-VII)。これら 7 亜系統は短期間に放散しているので、詳しい分岐順を推定することはわずかの例外を除き現時点では無理である。以下、亜系統別に解説する。図 2 のサンプルの採集地点の地図を見ると分かるように、調べた限りでは、新潟県の一部を除き、亜系統間の重なりはなく、明らかな地域特性が見られる。

(I) 対馬のツシマオサムシのみを含む。(II) 隠岐の

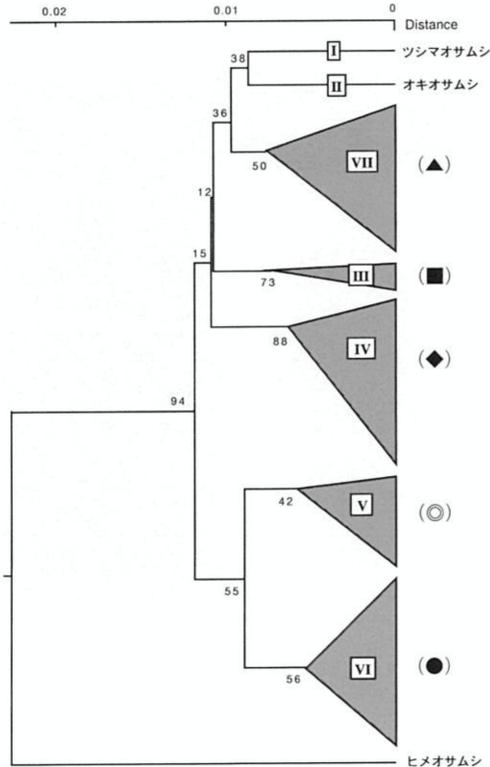


図 1. クロオサムシ類のミトコンドリア COI 遺伝子による系統樹。図右の ( ) 内のシンボルは図 2 の地図のものに対応。I-VII は本文中の亜系統に対応。

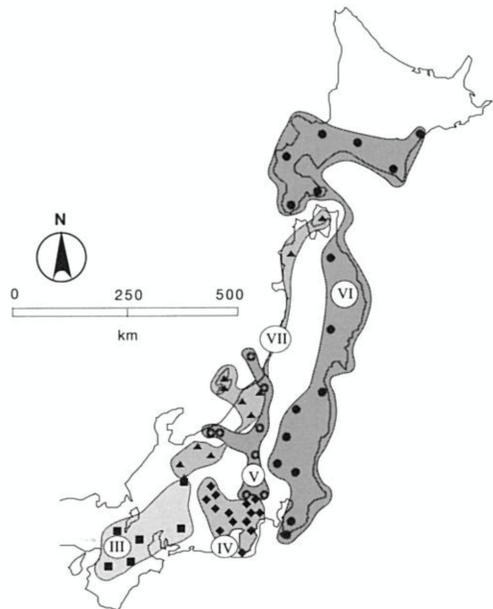


図 2. クロオサムシ類のサンプルの採集地点。ごく近い産地、または同一産地の場合は、一つのシンボルに複数(2-11)個体が含まれる。これらの mtDNA には、ほとんど差が認められなかった。III-VII は本文中の亜系統に対応。図中ツシマオサムシ(I)、オキオサムシ(II)は除いてある。

オキオサムシからなる。(III) 紀伊半島から中部地方南西部のヤマトオサムシが入る。(IV) 神奈川、静岡を中心に分布するルイスオサムシを主体とするが、静岡のスルガオサムシの1サンプルのほか、クロオサムシの亜種とされるマルバネオサムシの一部もここに入った。(V) 関東北部から新潟県新発田を経て粟島にかけて分布するもののほか、糸魚川付近のクロオサムシが入る。後でも述べるように佐渡のクロオサムシ(サドクロオサムシ)はここに入らず、粟島のクロオサムシとは異なる亜系統に属する。(VI) 7亜系統中もっとも広い分布域をもつもので、北海道南西部から東北地方の太平洋側に沿い房総半島南端までのものが入り、ルイスオサムシの亜種とされるアワカズサオサムシや、房総半島のクロオサムシの亜種エサキオサムシも含まれる。北海道内のキタクロオサムシは、産地による差はほとんどなく、ごく最近分布を拡大したものと考えられる。また、これらは岩手県八甲田町のものときわめて近縁で、本州東北の太平洋側のクロオサムシとも近く、日本海側のクロオサムシ(サドクロオサムシやトウホククロオサムシ)とは組まない。このことは、非公式に「オサムシ・ニューズレター」4号9頁(1996)に書いたが、今回の解析でこのことがいっそう明確と

なった。(VII) この系統は、本州東北の日本海側に沿って分布するもので、新潟県の本土側とその対岸の佐渡から秋田県を経て青森県の下北半島に達する。なお、図2で示したように西は富山県の一部までいる。この亜系統の中には岐阜のヤマトオサムシとみられるものや、サドクロオサムシを含む形態的に分けられたいくつかのクロオサムシの亜種が含まれる。さらに、図2の実線で囲った領域は、調べたサンプルの産地を連ねたにすぎず、各亜系統の分布境界線を正しく表しているものではない。また、複数の亜系統の境界では、交雑個体が含まれている可能性もある。いずれにせよ、ここに紹介したmtDNAの7亜系統の分岐は古く、それらの存在を疑う余地はほとんどないと言ってよい。

## 参考文献

Su, Z.-H., et al., 1996. Parallel evolution in radiation of *Ohomopterus* ground beetles inferred from mitochondrial ND5 gene sequences. *J. Mol. Evol.*, 43: 662-671.

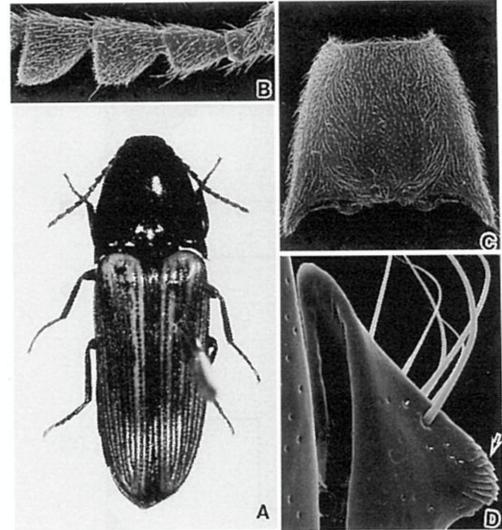
(OYAMA・蘇・大澤: JT生命誌研究館)  
(富永: 奈良県奈良市)  
(斉藤: (財)自然環境研究センター)  
(柏井: 宝仙学園)

○*Ampedus (Parelater) subcostatus* と呼ばれる Korea 産コメツキムシ

Korea には上翅が朱赤色をした *A. (P.) subcostatus* (KOLBE, 1886) と *A. (P.) analogicus* (KOLBE, 1886) が分布している。これらはきわめて類似していて、現在でもその実態はよく分かっていないが、前種については原記載で全形図が付けられている。

筆者は、Korea 産の *A. subcostatus* と思われる雌雄標本を入手し、その形態を調査した。雄の体長は 9.5 mm 内外、体は黒色で黒色毛を生じ、上翅は朱赤色である(図A)。触角の第2節は短小で、第3節から鋸歯状を呈し、第4節は第5節とほぼ等長である(図B)。前胸背板は台形状で、背面は膨隆し、正中部の後方は浅い縦凹溝を有する(図C)。交尾器(背面)の側突起の末端の三角状部は幅より長く、外縁角には10個内外の段刻を生ずる(図D↓)。

三輪(1933)は、日本に分布する同類の種は、これら Korea 産と同種と思われるとしているが、日本産で最も類似しているのは、G. LEWIS(1894)が熊本県の大矢山から新種として記載した *A. (P.) miles* である。しかし、触角の第2-4節や前胸背板や雄交尾器の形態に相違がみられるので、別種と考えられる。図示した標本は Seoul 産の雄である。終わりに標本を支援していただいた Seoul Women's University の Prof. Tae-Man HAN に感謝の意を表す。



## 引用文献

KOLBE, H. J., 1886. Beiträge zur Kenntniss der Coleopteren-Fauna Koreas. *Arch. Naturgesch.*: 139-240, ref. 197-199.

LEWIS, G., 1894. On the Elateridae of Japan. *Ann. Mag. nat. Hist.*, (6)13: 26-48.

三輪勇四郎, 1933. 朝鮮産叩頭虫に就いて. 台湾博物会会報, 23(125): 151-160.

(愛知県岡崎市, 大平仁夫)

## ○静岡県下のミツギリゾウムシ科甲虫の記録

## 1. エノキミツギリゾウムシ

*Eterozemus celtis* (LEWIS)

1 頭, 榛原町石雲院, 2. V. 1997.

非常に特徴的な種で, 他の日本産ミツギリゾウムシと間違えることはないだろう. 筆者の知る限り本州では初めての記録と思われる. 石雲院の社寺林として残された林中でヤマモモの幹に静止中の個体を得た. このヤマモモは, 胸高直径約 30 cm 程で, 枯死部や腐朽部はなかった. また, 飛孔なども見受けられなかったので, 偶然飛来したものと思われる. 石雲院の社寺林は, 胸高直径で 1 m ほどのスダジイ・ツブラジイ・ヤマモモ・スギの古木からなり, 周囲の林も, スダジイを主体とした雑木林で, ミヤマクロハナカミキリ・ヨコヤマトラカミキリ・シロスジカミキリ・センノキカミキリ・タテジマカミキリなどが生息していたが, 静岡空港の建設のために付近の様相は一変しつつある.

## 2. アカツツホソミツギリゾウムシ

*Callipareius japonicus* (NAKANE)

2 頭, 水窪町五丁坂頭山, 29. VII. 1990; 17 頭, 水窪町常光寺山, 22. VII. 1991; 1 頭, 水窪町五丁坂頭山, 4. VIII. 1991.

本州では三重県平倉と伊豆半島で記録されている. 水窪では, 叩くと崩れ落ちてしまうくらいになった朽木より得たほか, 伐採されて間もない広葉樹の幹に, 多数のキクイムシ類と共に来集しているところを得た. キクイムシはかなり穿孔を作っていたが, 本種は, 樹皮上を徘徊しているだけで, 特に生態的な観察はできなかった.

## 3. クロツツホソミツギリゾウムシ

*Callipareius kojimai* MORIMOTO

9 頭, 静岡市上千枚沢, 21-25. VIII. 1993; 1 頭, 本川根町梅地, 5. VIII. 1999.

上千枚沢では, 直径 10cm くらいの樹皮のない樹種不明の倒木上を歩行していた個体や, キクイムシの開けたと思われる穿孔の中に頭部を突っ込んでいた個体を採集した. 梅地では, カラスザンショウの花をすくって得た. 採集環境を比較すると, 上千枚沢は千枚岳の山腹にあり, 標高 1400 m 地点でヤナギとハンノキの中にミズナラが混じる林であるが, 梅地は標高 500 m でスダジイやコナラにネムノキやケヤキ・カエデなどが混じる林であり, 共通性があまりないように思われる. 本種の分布には, 植物は関係ないのかもしれない.

## 4. ミツギリゾウムシ

*Baryrhynchus poweri* ROELOFS

1 ♀, 本川根町長島, 23. VI. 1999.

同地域では, すでに数個体が採集され記録されているが, 個体数はかなり少ない. 長島ダムの工事で切り出された材木上を歩行している個体を得た.

## 5. ムツモンミツギリゾウムシ

*Pseudorychodes insignis* (LEWIS)

1 ♂, 静岡市新田, 16. VIII. 1973; 1 ♂, 静岡市安部

峠, 24. VII. 1978; 1 ♂ 2 ♀, 水窪町五丁坂頭山, 1. VIII. 1987; 1 ♂, 水窪町門桁山, 10. VII. 1988; 2 ♂, 水窪町五丁坂頭山, 14-15. VII. 1989; 1 ♂, 水窪町常光寺山, 3. VI. 1990.

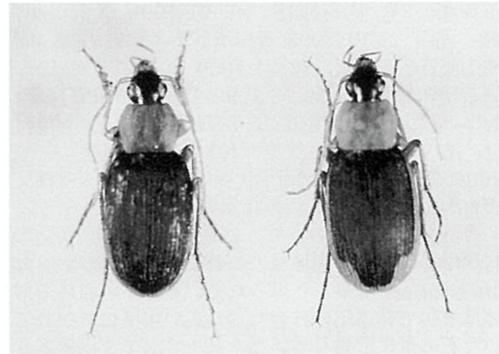
伐採地での灯火採集や, 土場の材木上で得た. 採集例は比較的多いが, 個体数はあまり多くはないようである.

(静岡県焼津市, 杉本可能)

## ○静岡県におけるオオサカアオゴミムシの記録

オオサカアオゴミムシ *Chlaenius pericallus* REDTENBACHER は, 保育社の日本甲虫図鑑 (II) によると関東地方の平地にはやや多いらしいが, 静岡県からは今までに報告されていなかった. 隣県の神奈川では今までに 2 ヶ所から記録があるにすぎない (荻部治紀, 1999, 神奈川虫報, (125): 39-40). 筆者は本種を静岡県において採集しており, 古い記録ではあるが重要なデータと思われるため報告しておく. 採集場所は, いわゆる里山にある水田 (棚田) の畦道に置かれた板の下である.

1 ♂ 1 ♀, 静岡県富士郡芝川町羽鮒 (MC5238-64-55), 6. VII. 1990, 石川採集.



本種を採集した場所を 10 年ぶりに訪れたところ, 当時は 1 軒の家もない水田地帯であったのに, 今では住宅が多く建ち並び残された水田も放棄され乾燥化しているところが多かった. そのため, 採集する場所もない状況で本種の再確認はできなかった. 周辺には 10 年前と同じ様な環境が存在するため, まだどこかに生き残っているものと思われるが, オオサカアオゴミムシは湿地環境の消失により大きな影響を受けている種の一つと思われる.

なお, 静岡県では記録の少ないヒトツメアオゴミムシ *Chlaenius deliciolus* BATES の採集例も合わせて報告しておく. いずれも尾根部の草地の石下より得た.

1 ♂, 静岡県島田市上相賀 (MC5238-21-72), 18. V. 1982, 石川採集; 1 ♂, 静岡県榛原郡相良町東萩間 (MC5238-11-02), 18. VI. 1990, 石川採集; 1 ♂, 同地, 2. VIII. 1990, 石川採集.

(静岡県静岡市, 石川 均)

## ○クボタヤマトヒゲトアリヅカムシの採集例

*Diartiger kubotai* NOMURA クボタヤマトヒゲトアリヅカムシは東京都、山梨県、滋賀県、京都府、和歌山県、鳥取県、愛媛県、そして福岡県産の標本に基づいて NOMURA (1997) によって記載された。

本種は近縁の *Diartiger fossulatus fossulatus* SHARP コヤマトヒゲトアリヅカムシとは腹背板の基部の凹みがより深く幅広いこと、オスでは中脚転節の突起先端が尖ることと同腿節に歯状突起がないことにより区別されている。本種を含む *Diartiger* 属はそのほとんどが好蟻性として知られており、本種の寄主としては *Lasius (Lasius) japonicus* SANTSCHI トビロケアリ (NOMURA, 1997 では *L. niger* としている) がこの種は後に *L. japonicus* のシノムとされた) が知られている。

筆者はこれまで本種の記録がなかった神奈川県、埼玉県産の標本を検する機会を得たので、その生態的知見についてもあわせて報告する。

1♂(図)2♀, 神奈川県藤野町沢井沢, 10. V. 1998, 橋村正雄採集; 1♂1♀, 埼玉県荒川村川浦溪谷 15. VI. 1997, 豊田浩二採集; 1♀, 同所, 13. VI. 1999, 筆者採集; 2♀, 同秩父市天目山林道 12. VI. 1998, 豊田採集; 2♀, 同有馬山, 21. VI. 1998, 豊田採集; 2♀, 同所, 5. VI. 1999, 豊田及び筆者採集; 1♂, 同浦山溪谷広河原沢, 12. VI. 1999, 筆者採集; 2♂2♀, 同吉田町城峰山, 29. V. 1999, 豊田及び筆者採集; 1♂, 同大滝村大陽寺近く, 4. VII. 1999, 同大洞橋付近, 4. V. 2000, 筆者採集; 1♂, 同雲取林道, 6. V. 2000, 豊田採集。野村周平氏保管の1♀(埼玉県秩父市有馬山産, 1998) 以外は筆者保管。

今回検した標本のうち、1998年に埼玉県秩父市有馬山で得られた個体は、これまで記録のなかった *Mirmica* sp. の巣より得られている。それ以外の個体はすべて林道脇の日当たりの良い場所におかれていた石の下に営巣していたトビロケアリの巣より



神奈川県産クボタヤマトヒゲトアリヅカムシ♂。

得られた。採集者の豊田氏によればこの個体は巣の内部より採集されたということであるが、コヤマトヒゲトアリヅカムシも本来の寄主以外のアリの巣に偶発的にいる事も知られているので(野村氏私信)、その個体も一時的にいたのではないかと思われる。

また、今回あげた採集地のうち、標高 500 m 以上である神奈川県藤野町、埼玉県秩父市天目山林道、浦山溪谷、荒川村川浦溪谷、および大滝村大陽寺から採集された個体はコヤマトヒゲトアリヅカムシと共に同じ巣内より得られた。しかしながら、これよりも標高の低い場所ではコヤマトヒゲトアリヅカムシのみしか得られない。このことから、クボタヒゲトアリヅカムシは主に山地に、コヤマトヒゲトアリヅカムシは平地に主に生息し、そのちょうど境目付近の標高には両種が混生しているのではないかと思われる。

末筆ながら、日頃からお世話になり、本種に関しての情報をご教示頂いた国立科学博物館の野村周平博士、神奈川県小田原市の平野幸彦氏、貴重な標本を恵与下さった東京都足立区の橋村正雄氏、埼玉県嵐山町の豊田浩二氏に厚く御礼申し上げる。

## 引用文献

NOMURA, 1997. A systematic revision of the clavigerine genus *Diartiger* SHARP from East Asia (Coleoptera, Staphylinidae, Pselaphinae), *Esakia*, (37): 77-110.

(東京農大, 新井志保)

## ○アリスアトキリゴミムシの生態的知見(追補)

豊田(2000)では *Lachnoderma asperum* BATES アリスアトキリゴミムシの好蟻性を示唆する知見について述べた。しかしこの中で本種の生態的知見について重要な文献を引用漏れしていた事が明らかになったので、追捕の意味も含めて本種の越冬例について報告する。

本種の越冬場所については田中(1997)で大府府桂川の事例が報告され、溝脇の砂地や石ころのすき間、苔の下から多数の個体得られた事が記されている。また斎藤(1999)の針葉樹の朽木からの例もある。さらに豊田(2000)ではカワラケアリの越冬集団内もしくは周辺の石の下での越冬が予想された。

このたび筆者は、本種の越冬に関して若干の知見を得ることができた。越冬が確認されたのは、埼玉県嵐山町の都幾川河川敷である。当日はアリヅカムシ採集のため、当地にわずかに残るススキ原にてリターを振っていた。ススキの根際に積もるリターを採取するため鎌で枯茎を伐採したところ、その株の中央付近のリター中より越冬中のアリスアトキリゴミムシが現れた。この株をさらに丹念に調べてみると、根際に埋もれていた石の下よりさらに複数個体得られた。また、このススキの根の隙間からは同時にカワラケアリの越冬群も確認された。ケアリ

類はススキの根株によくコロニーを形成するようで、以前、別の場所でススキの根を調べた際、トビイロケアリのコロニーがススキの根株より確認され、好犠性昆虫をいくつか採集したことがある。これは活動時の話であるが、今回の場合も状況的にはちょうどこれと似たようなものであった。

今回の例から判断すると、アリスアトキリゴミムシの越冬場所はカワラケアリのコロニーがある場所の周辺で、ある程度湿度が保たれている環境であるということが考えられる。田中(1997)の中でも同じ場所でアリの越冬が見られたが、直接アリの巣からは見出せなかったことが記されている。これは今回の場合とほとんど同じである。

豊田(2000)では好犠性を指し示す知見のひとつとしてカワラケアリの行列からの採集例を述べたが、すでに森(1997)でトビイロケアリの行列での観察例が報告されている。共に1例づつの報告ではあるが、本種がケアリ類の行列に参加することはほぼ間違いないであろう。

以下に嵐山町での採集データを示す。

3頭, 29. XII. 1999; 1頭, 23. I. 2000, いずれも埼玉嵐山町大蔵の都幾川河川敷, 筆者採集, 保管。

末筆ながら、文献について御教示いただいた神奈川県藤沢市の渡辺 崇氏に厚く御礼申し上げます。

#### 引用文献

- 森 正人, 1997. アリスアトキリゴミムシの生態に関する一知見. *ねじればね*, (76): 8-9.  
 斎藤勝雄, 1999. アリスアトキリゴミムシの採集例. *インセクトマップオブ宮城*, (10): 39.  
 田中 勇, 1997. アリスアトキリゴミムシの冬季採集. *ねじればね*, (76): 8.  
 豊田浩二, 2000. アリスアトキリゴミムシとカワラケアリの関連について. *甲虫ニュース*, (127/128): 13-15.  
 (埼玉嵐山町, 豊田浩二)

#### ○石川県未記録のカミキリムシ4種の記録

石川県未記録のカミキリムシを採集したので報告しておく。富山県のカミキリムシの記録については富山県昆虫同好会の北村征三郎氏にご教授頂いた。御礼申し上げます。

##### 1. ヒゲトハナカミキリ *Pachypidonia bodemeyeri* (PIC)

1♂1♀, 石川郡尾口村尾添, 30. VII. 1999, 江崎功二郎採集。

北陸では富山県下で1例の記録がある。

##### 2. オダヒゲナガコバネカミキリ *Glaphyra gracilis* (HAYASHI)

1♂, 加賀市刈安山, 20. V. 2000, 八神徳彦採集。  
 北陸では初記録と思われる。石川県ではこれ以前に記録があるとされているが、標本が確認できない等の理由で石川県カミキリムシ目録からは削除されてきた(井村, 1998)。採集地の刈安山山頂にはホストとされるモミの分布はない。平野部に分布するモミから発生した個体が吹き上げられたか、周辺に

点在するアカマツから発生した可能性が考えられる。

##### 3. シロオビゴマフカミキリ

*Falsomesosella gracilior* (BATES)

1♂, 石川郡鳥越村河原山, 10. VI. 2000, 江崎功二郎採集。

##### 4. カスガキモンカミキリ

*Paramenesia kasugensis* (SEKI et KOBAYASHI)

1♀, 江沼郡山中町大土, 16. VII. 2000, 江崎功二郎採集。

#### 参考文献

- 井村正行, 1998. カミキリムシ類. 石川県の昆虫, 197-217. 石川県環境安全全部自然保護課.  
 北村征三郎, 1982. 富山県産甲虫類の採集記録. *AMICA*, (27): 23-97.  
 中井昭信, 1989. 富山県未記録の甲虫(1). *AMICA*, (30): 28.  
 佐々治寛之・井上重紀・酒井哲弥・斎藤昌弘・陶山治宏, 1998. カミキリムシ科. 福井県昆虫目録(第2版), 229-250. 福井県自然環境保全調査研究会.  
 (石川県林業試験場, 江崎功二郎・八神徳彦)

#### ○*Auletobius planifrons* (オトシブミ科) の採集例

*Auletobius planifrons* SAWADA, 1993 は、原記載時に、西表島・石垣島・沖繩本島・沖永良部島・徳之島・奄美大島・トカラ中之島から記録されている。筆者らは新産地の与那国島を含む多数の本種の標本を所持しているののでここに報告する。

7頭, 与那国島インビ岳, 12-14. IV. 1997, 吉武採集; 1頭, 西表島浦内, 8-11. IV. 1997, 吉武採集; 9頭, 西表島白浜林道, 8-11. IV. 1997, 吉武採集; 72頭, 石垣島バンナ公園, 1-7. IV. 1997, 吉武・石川採集; 18頭, 石垣島オモト岳, 1-7. IV. 1997, 吉武採集; 5頭, 石垣島於茂登, 1-7. IV. 1997, 石川・吉武採集; 石垣島嵩田林道, 15-20. IV. 1994, 松本浩一採集; 6頭, 沖繩本島多野岳, 16-21. IV. 1997, 吉武採集; 10頭, 沖繩本島与那演習林, 16-21. IV. 1997, 吉武採集; 5頭, 沖繩本島大園林道, 16-21. IV. 1997, 吉武採集; 5頭, 沖繩本島与那覇岳, 16-21. IV. 1997, 吉武採集; 1頭, 徳之島三京, 14. III. 1993, 岸本年郎採集; 4頭, 奄美大島油井岳, 23-26. IV. 1997, 吉武・石川採集; 1頭, 奄美大島高知山, 23-26. IV. 1997, 吉武採集; 1頭, 奄美大島中央林道, 23-26. IV. 1997, 吉武採集; 2頭, 奄美大島大和村今里, 23-26. IV. 1997, 吉武採集。

大多数はスダジイの新梢から得られたもので、石垣島オモト岳産の一部はライト・トラップに飛来した。

常日頃から実に様々な面でご協力下さる松本浩一、岸本年郎両氏に感謝の意を表して結びとしたい。

(東京農大, 吉武 啓・石川 忠)

## コメツキムシの文献紹介『中国经济叩甲图志』

鈴木 互

江世宏・王书永 著. B5版. 10+195頁. 84図, 4表, 16図版. 中文(付英文摘要). 発行日: 1999年12月. 中国农业出版社発行.

[Economic click beetle fauna of China (Coleoptera: Elateridae). By S-H. JIANG & S-Y. WANG. China Agriculture Press.]

中国经济昆虫誌をはじめ、重要な昆虫の本を次々と出している中国から、コメツキムシ科甲虫の図説が昨年暮れに出版された。タイトルにある「叩甲」とは、コメツキムシ科の甲虫を示した中国名で、大陸中国ではこの名で分類名が統一されているようである(台湾では、日本でも使用していた叩頭蟲を現在使用している)。

本文は、英文による摘要を除いて、中文で解説されているので、我々には少々読みづらいものとなっているが、多くの形態図と巻末に用意された16図版(131種)もの原色図がそれを十分に補ってくれるだろう。とくに図版は、中国经济昆虫誌のカミキリムシなどのそれとは比較にならないほどすばらしいものに仕上がっており、図鑑のように眺めているだけでも楽しい。

本書の内容は、まずコメツキムシ科の概要とその分類学的位置に始まり、生活習性と経済的重要性、中国内における属・種の地理的分布が示され、続いて分類学的背景と成虫の形態の特徴の記述がされている。分類の項では、亜科(12)、属(65)、種(165)の検索表が用意され、分類単位ごとにその特徴が解説されている。属までの検索表は、既知属の多くが取り上げられているので利用価値が高いものになっているが、属内の種の検索表については、30属しか用意されていないことや、すべての既知種を対象としていないため、利用はかなり限定されたものになっている。

学術的にとくに重要なものとしては、1新属

(*Parapenthes*), 4新種 (*Sternocampsus castaneus*, *Parapenthes varimaculatus*, *Dalopius obscuricollis*, *Quasimus shaxianensis*) の記載と21種の中国新記録[既に記録のあるものも含む]があり、中国だけでなく近隣地域のコメツキムシを調べる上で無視できない。日本と共通の種も多く載せられており、このうちオオダイルリヒラタコメツキ *Actenicerus odaisanus* (MIWA), トラフコメツキ *Selatossomus onerosus* (LEWIS), メスアカキマダラコメツキ *Gam-epenthes versipellis* (LEWIS) の3種は、

データを持ったものとしては最初の記録となる。ただし、オオダイルリヒラタの記録については、日本での分布域も広くないことに加え、用意された原色図の前胸背板の形状が異なるため、再検討が必要かと思われる。また、後2種も斑紋の様式が日本産のものとはやや異なるようである。

参考文献は18頁にもわたるかなりの数がリストアップされているが、文中には引用の明記がほとんどされていないため、利用しにくいものになっている。また、本書に掲載された種と直接関わりのない文献が多く含まれているのはどういう訳だろう。それから、細かいことになるが、学名や人名の綴りの誤りが非常に多いこと、学名索引の頁数がそっくり抜けてしまっている

のも利用側としては気になった。

いずれにしても、このようなコメツキムシの図説が中国から出版されたのは初めてのことであり、内外の研究者にとって、今後重要な文献となることは間違いない。本書の存在によって「叩甲」に興味を持つ多くの研究者が中国から育つことを期待したい。日本国内では亜東書店で入手できる。4200円。

末筆ながら、本書の存在をご教示いただいた大平仁夫博士にお礼申し上げます。

(東京都世田谷区)



## ◇来年発行の第133号より甲虫ニュースが変わる◇

甲虫ニュース第133号より編集方針が変更になります。大きな変更点は、甲虫ニュース独自の編集委員会を組織し、従来の掲載内容に加え和文の原著論文や地域甲虫相、随筆、採集記などをも取り扱い、

総説や解説、論文等については1段組になる点です。原稿の送付先は、これまでと同様、196-0012 東京都昭島市つじが丘2-6-22-806 妹尾俊男宛 お願いします。電子メールでも受け付けております。senoh@ra2.so-net.ne.jp

○ミエクビアカジョウカイの記録

ミエクビアカジョウカイ *Athemus* (*Athemellus*) *watanabei* (ISHIDA et M. SATO), 1993 は三重県美杉村の三重大学演習林で採集された♀♂1♀の標本に基づいて記載されたが、記載後の追加記録は聞いていない。名古屋女子大学において命名者の一人である佐藤正孝博士に伺った話では、これらの type 標本のすべては灯火採集の結果であるとのことだった。今回、筆者は和歌山県龍神村において本種を採集することができたので、♂交尾器の図を添えて報告する。

1♂, 和歌山県龍神村護摩壇山, 13. V. 2000, 桐山功採集。

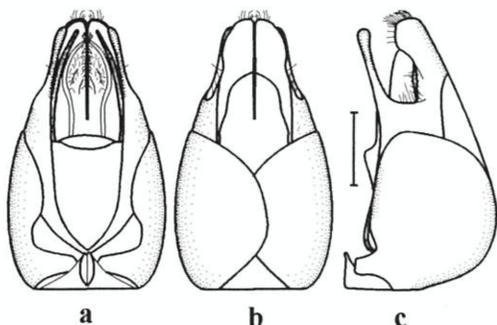


図1. ミエクビアカジョウカイ *Athemus* (*Athemellus*) *watanabei* (ISHIDA et M. SATO) の♂交尾器。a: 腹面 b: 背面 c: 側面。(スケール: 0.5 mm)

この個体は、高野龍神スカイラインの護摩壇山駐車場にあるトイレで、当日の早朝電灯に来ていたものである。

参考文献

ISHIDA, K., & M. SATO, 1993. A new *Athemellus* (Coleopt., Cantharidae) from Japan. *Elytra*, Tokyo, 21: 47-50. (岐阜県岐阜市, 桐山 功)

○キリクチマルハナノミダマシの九州の記録

キリクチマルハナノミダマシ *Tohlezkus rufus* (SAKAI, 1980) は最初、酒井雅博博士により愛媛県産と徳島県産の標本を基に新属 (*Subulistomella*) 新種として記載されたものである。その後、*Tohlezkus* 属に移されたが、新産地は発見されていないようである。筆者は九州で採集された標本を持っているので、報告しておきたい。

2頭, 宮崎県北川町, 3. XI. 1979, M. TAKEISHI 採集。

田中慎吾氏から土壌性の甲虫を多数頂いた中であつたもので、リターから得られたものと思われる。

参考文献

SAKAI, M., 1980. A new genus of Eucinetidae from Japan (Coleoptera). *Trans. Shikoku ent. Soc.*, 15 (1/2): 83-

85.

(神奈川県小田原市, 平野幸彦)

○ *Ochyromera japonica* (ゾウムシ科) の越冬例

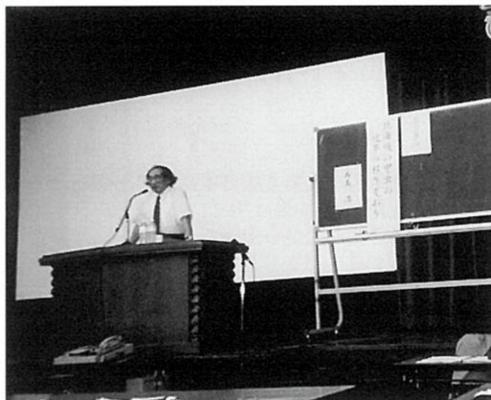
*Ochyromera japonica* は1874年にROELOFSによって記載された種である。本種は本州、九州および琉球に分布し、成虫がイヌマキから採集されることが知られているが、越冬に関する報告はこれまでのところないようである。最近筆者は、ケヤキの樹皮下で越冬中に採集された本種の標本を検査する機会に恵まれたので記録する。

1頭, 奈良県春日山, 5. I. 2000, 岡島賢太郎採集。貴重な標本を恵み下さった東京農業大学の岡島賢太郎氏に深謝する。

(九州大学, 吉武 啓)

◇大会報告◇

2000年度の日本鞘翅学会第13回大会は、例年とは異なり、真夏の7月22日(土)~23日(日)北海道大学農学部において開催された。



記念講演中の西島 浩氏

初日は午後から西島 浩氏の「北海道の甲虫の近年の移り変わり」と題して記念講演が行われ、数々の興味深いお話があった。14時半から同定会があり、珍しい虫が持ち込まれ、多めに賑わった。続いて17時から総会が開かれ、新しい役員を選出や自然保護委員会の設立などが了承された。最後は中央食堂で懇親会があり、北海道の味を楽しみつつ、虫談に花を咲かせた。飲み足りない人はすすき野あたりに出掛けたようである。

翌日は9時半から10件の口頭発表があり、新しい知見が述べられた。午後からはシンポジウムが開かれ「北に生きる甲虫たち」のタイトルのもとに、石浜宣夫氏の「北海道の注目すべきカミキリムシ」塚本瑛一氏の「日本産食糞性コガネムシ類の分布について」岡本宗裕氏の「DNAから見たクビナガオサムシの系統関係」などの話題提供があり、論議百出して盛り上がり、時間を30分もオーバーした。最後に5部門の分科会があり、17時頃終了した。な



十勝三股での採集会

お、2日間にわたり、大講堂前踊り場で6件のポスター発表があり、多くの人が見入った。

今回の参加者はおよそ100名で、当日駆けつけた人も多かった。翌日は十勝三股での採集会もあり、充分満足した顔でにこやかに散会していった。

末筆ではあるが、大会準備に携わった多くの方々に厚く御礼申し上げたい。次回の第14回大会は東京農大で2001年11月17日(土)~18日(日)に開催される。

(企画担当、平野幸彦)

#### ◇国際動物命名規約第4版日本語版の出版と頒布◇

「国際動物命名規約第4版日本語版」が日本動物分類学関連学会連合から出版された。英仏語版の規約は今年の1月1日から発効しているが、この版から動物命名法国際審議会の認定を受けた各国語版も、「英仏語版と同等の効力と意味と権威を有する正文である」ことが規定された。このほど出版された日本語版は、今年の7月17日付で同審議会から正文であるとの認定が得られているので、この版の条文に基づいて命名法上のさまざまな処理が可能になった。日本語版の出版により難解な英仏語版の条文から解放されることは、個々の研究者のストレスを軽減するばかりでなく、動物分類学の普及にも貢献するであろう。

日本語版はB5判、152頁、クロス張ハードカバーで頒布価格は3000円(送料込)である。価格の半分近くはロイヤリティーとして、著作権を持つ動物命名法国際信託に支払われる。大きい財政赤字を抱えている同信託の援助にもなるので、多くの会員が購入して下さるようお願いする。

購入を希望される会員は、氏名、送付先住所、電話番号、必要部数と、公費払いをご希望の場合はそれに必要な書類と通数、宛先および日付の記入方法を明記の上、下記へ申し込まれたい。なお、電子メールをお使いの会員は、ファクスではなく必ずメールをお使い頂きたい。

購入申し込みおよび問い合わせ先:

国立科学博物館動物研究部 友国雅章  
(tomokuni@kahaku.go.jp; Fax. 03-3364-

7104)

#### ◇会告◇

最近、海外、とくにアジアの国々で昆虫採集に関する日本人のトラブルが多発しています。たとえば今夏、本会会員の1人は台湾を出国する際、同国の保護昆虫2類に指定されている種の1つのクワガタムシ1頭を所持していたことで逮捕され、同国のマスコミに大々的に報道されたうえ、長期間にわたり身柄を拘束されました。この件は、保護昆虫に関する最初の摘発とされるうえ、逮捕のきっかけが第三者による通報によるものでした。さらに、ベトナムではハノイ近郊の著名な採集地であるタムダオで2名が、また南部のパオロックでも2名が逮捕される事件が起きました。国立公園であるタムダオやクホンはもちろん、国立公園外でも許可なしには採集できない状況となっています。

この他にも、ここ数年の間に、中国、インド、ネパール、スリランカ、インドネシア、タイ、オーストラリアなどでも採集旅行中の日本人が逮捕されたり、標本を没収されたりするなどのトラブルが伝えられています。これらは、アジアとその周辺国々において、とくに外国人による採集の規制が強化される傾向にあって、その内容が十分理解されていないためと考えられます。採集と保護の問題については、国によっても考え方が異なりますし、法律事情も異なっています。その法律を事前に十分把握することは必ずしも容易ではありませんが、いずれにしても自由に採集活動が行える地域はむしろ稀と思われます。本会会員におかれても、海外での採集にあたっては、現地の状況を十分理解し、トラブルのないようご留意いただくようお願いいたします。

(会長・自然保護委員会委員長)

#### 甲虫ニュース 第131号

発行日 2000年10月15日

発行者 大林延夫

編集者 妹尾俊男

発行所 日本鞘翅学会 〒169-0073 東京都新宿区百人町3-23-1 国立科学博物館分館動物研究部昆虫第2研究室 ☎ 03-3364-2311

印刷所 (株)国際文献印刷社

年会費 6,000円(一般会員)

郵便振替口座番号 00180-3-401793

#### 昆虫学研究器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめて出来たステンレス製有頭昆虫針00,0,1,2,3,4,5,6号、有頭ダブル針も出来ました。その他、採集、製作器具一切豊富に取り揃えております。

〒150-0002 東京都渋谷区渋谷1丁目7-6

振替 00130-4-21129

電話 (03) 3409-6401 (ムシは一番)

F A X (03) 3409-6160

(カタログ贈呈) (株)志賀昆虫普及社